武州徳丸原操練に参加した高島秋帆門人

―既知史料の吟味と新史料の紹介による比較検討―

はじめに

㈠ 既存史料における高島門人の記述

(1) 『陸軍歴史』所収の史料「徳丸原調練業書」

(2) 大槻如電編『新撰洋学年表』所収の史料「徳丸原銃隊調練人名」

(3) 遠藤早泉『高島秋帆』所収の門人史料二件

①史料「天保十二年五月九日於武州徳丸原西洋砲術業書」

②史料「高島秋帆翁試砲于江府図記」

(4) 『天保雑記』所収の史料「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」

㈡ 先行研究における徳丸原操練時の高島門人

㈢ 高知県立図書館蔵「高島流砲術」の紹介

㈣ 高知県立図書館蔵「高島流砲術」の内容

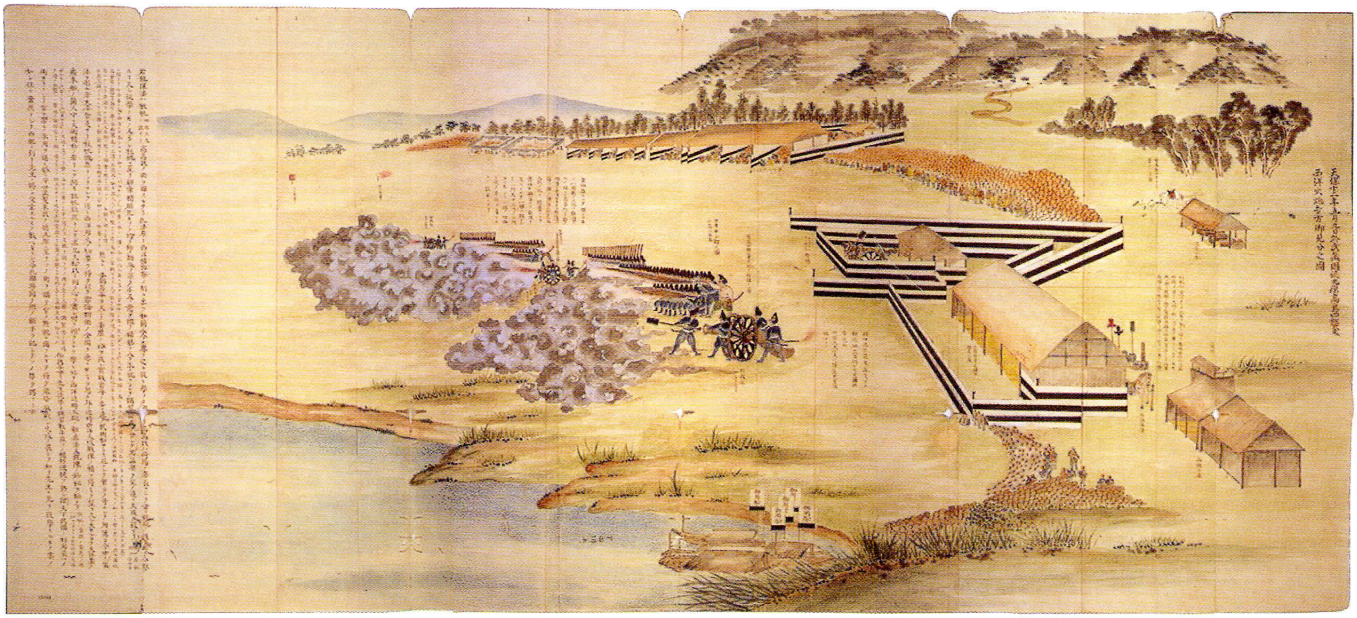
㈤ 武州徳丸原操練に参加した高島門人の特定

おわりに

注記

追記

信州大学教授　坂本　保富



東北大学附属図書館蔵「新法火術図」（狩野文庫）

この写真史料は、旧制の第一高等学校長や京都帝国大学文科大学長などを歴任した秋田県出身の哲学者・狩野亨吉（かのうこうきち、1865—1942）の旧蔵せるもので、高島秋帆が天保12年（1842）５月に武州徳丸原（現在の東京都板橋区高島平）で実施した西洋砲術操練の様子を描いた彩色図（写本）である。現在は、東北大学附属図書館の「狩野文庫」に納められている。

はじめに

隣国の清朝中国に勃発したアヘン戦争（一八四〇―一八四二）によって、古代以来、日本の宗主国であった清朝中国が英国に大敗を喫したという、オランダ定期船がもたらした情報は、日本の多くの為政者や知識人たちを震撼させずにはおかなかった。わが国における西洋流砲術の開祖とされる高島秋帆（一七九八―一八六六）も、その一人であった。長崎町年寄であった高島は、その時には、すでに西洋砲術を修得して門人への教授活動を開始していた。その彼が、中国の惨敗とその惨状を日本にとっての一大事と受け止め、「オランダ風説書」を通して中国の敗因を分析した。その結果、彼は、武器の相違―優劣こそが東西両国の勝敗を決定づけたとの認識に至り、日本も西洋砲術を採用して武備の強化をはかることが急務であることを、一八四一年（天保十一）九月、当時の長崎奉行であった田口加賀守を介して幕府に上書した。それが、いわゆる高島の上書「洋砲採用の建議」であった。[1]

長崎町年寄・高島秋帆の上書を受け取った老中首座の水野忠邦（浜松藩主）は、高島に対して、早速、江戸へ出府して西洋砲術の操練を披露するよう命じたのである。幕命を受けた高島は、翌年の天保十二年（一八四二）正月二十二日、門人を引き連れて長崎を出立し、二月七日、江戸に到着した。[2] 高島が江戸に到着するやいなや、水野忠邦を筆頭に、大名や旗本たちは、次々と家臣を高島に入門させた。幕府当局は、西洋砲術の威力を痛感するや、遂に高島に対して、幕府専用の砲術演習場である武州徳丸原（現、東京都板橋区高島平）での西洋砲術の操練を命じるに至った。なお、江戸に到着した高島は、その翌月には幕府の新規召し抱えとなり、「諸組与力格仰せ付けられ、その身一代限り七人扶持増し下され、会所調役頭取」に任じられた。[3] すなわち高島は、武州徳丸原における西洋砲術操練の直前に、一代限りとはいえ、町人身分の町年寄から幕臣（諸組与力格で長崎会所調役頭取）に取り立てられたのである。

高島一門による武州徳丸原での西洋砲術操練は、同年五月八日に予行演習が行われ、翌日の五月九日に本演習が実施された。[4] この高島一門による徳丸原操練は、徳川幕府による公的な西洋砲術の認知と受容の決定的な契機となった、洋学史上における画期的な出来事であった。だが、そのような歴史的意義を有する高島操練に関しては、洋学史研究に先駆的な業績を遺した佐藤昌介が、次のように指摘したごとく、従来の洋学史研究史上では本格的な研究対象として取り上げられてはこなかった。

> 高島流砲術は、それが幕末洋学の端緒となったという意味で、注目すべき歴史的意義をもつはずであるにもかかわらず、その内容や伝播状況について、本格的な研究は皆無に近い。[5]

当日の高島一門による操練記録のいくつかが残されており、それらを用いた高島操練に関する記述が、これまでの洋学史研究の様々な先行研究の中でなされてきてはいる。だが、肝心の史料そのものに問題があるのである。すなわち、それら諸史料では、参加した門人数や門人名、さらには門人名の表記法などの諸点に関して、前述の佐藤昌介が下記のごとく指摘したように、極めて曖昧なものであった。

> 徳丸ヶ原の演練に参加したものの数は、おおよそのところは、演練を見分した鉄砲方井上左太夫の報告書（陸軍歴史、上、一四頁）および演練参加者の名簿から推察される。ただし、参加者名簿に載せられた人名のそれぞれの数と記入された総数とが一致せず、氏名や肩書きの身分も名簿によってまちまちである。[6]

この武州徳丸原での操練に参加した高島門人たちは、日本で西洋砲術を修得

した最初の世代であり、いわば高島塾の第一期生であった。彼らは、その後の西洋砲術の全国的な普及拡大に際しては、先駆的な役割を担った人々である。それ故に、以下の本稿は、既存史料に記された高島門人に関する記述内容、そして、それら既存史料を利用した先行研究の吟味を行い、その上で新史料として高知県立図書館蔵「山内家資料」を紹介し、それと既存史料や先行研究との比較考察を試み、もって徳丸原操練に参加した高島門人を析出し特定することを意図するものである。

(一) 既存史料における高島門人の記述

これまでの先行研究において利用されてきた、高島秋帆一門による武州徳丸原での西洋砲術調練に関する史料には、次のようなものがある。なお、武州徳丸原とは、現在の「東京都板橋区の中西部にあった原野」の幕府領で、第八代将軍吉宗のときから幕府の大砲調練場として使用されはじめ、寛政四年（一七九二）からは「鎌倉で行われていた大筒稽古の内、三百目玉大筒稽古」は、「武州西台徳丸原」で実施されるようになり、その後、天保十二年（一八四一）五月の高島一門による洋式砲術の調練によって、一躍、有名になった土地である。(7)

なお、『国史事典』では「徳丸ヶ原」と表記されているが、『増補大日本地名辞書』（冨山房、一九七〇年）や『角川日本地名大辞典』（角川書店、一九七八年）では「徳丸原」となっており、以下に紹介する関係資料でも「徳丸原」との記載が多く、本稿でも、史料の原文以外では「徳丸原」と表記を統一することとする。また、本稿における以下の史料の引用に際して新史料の紹介以外は、旧漢字は常用漢字に、変体仮名は「ひらがな」（「カタカナ」）に換えて表記するものとする。

(1) 『陸軍歴史』所収の史料「徳丸原調練業書」

高島秋帆一門による武州徳丸原での西洋砲術調練の記録としては、勝海舟編『陸軍歴史』に所収の「徳丸原調練業書」(8)が最もよく知られている史料である。しかし、残念なことに、この史料には、操練に参加した高島門人の個人名が記録されておらず、下記のように、当日、参加した門人数が、当日の操練の演目別に一括して記されているに過ぎない史料である。

「徳丸原調練砲術業書（わざがき）

同年五月九日、武州徳丸原に於て西洋流砲術業書

モルチール筒にてボンベン玉仕掛打

但し八丁目印小旗、これを建つ

一番　高島四郎太夫

二番　高島　浅五郎　同人伴

三番　高島四郎太夫

同筒にて焼打玉

四番　高島　浅五郎

五番　高島四郎太夫

ホーイツスル筒にて小形ボンベン仕掛横打

但し、八丁目印同断

六番　高島　浅五郎

七番　高島四郎太夫

同筒にて数玉

八番　高島　浅五郎

馬上砲　往返二筋　長崎地役人　近藤　雄蔵

鉄砲備打　高島四郎太夫門人　九十七人

右下知　　高島四郎太夫
　　高島　浅五郎
野戦筒三連　但し、一連四人ずつ　高島四郎太夫門人　　十二人
小筒打方　　右同断　　九十九人　」

また、同じく『陸軍歴史』所収の「天保十二年年五月九日　武州西台徳丸之(ママ)原に於て砲術業書（実演結果報告）」[9]や見分役を勤めた幕府鉄砲方・井上左太夫の「徳丸原火術見分の概況上申」[10]にも、当日の調練に参加した高島一門の記載がなされているが、その員数も上記のものと全く同数の九十九人である。

(2) 大槻如電編『新撰洋学年表』所収の史料「徳丸原銃隊調練人名」

簡潔過ぎる上記の史料を補うに有益な史料としては、大槻如電（おおつきにょでん）編『新撰洋学年表』がある[11]。編者の大槻如電（一八四五―一九三一）は、高島秋帆とは親密な交友関係にあった仙台藩儒大槻盤渓（おおつきばんけい）（一八〇一―一八七八）の次男であり、その盤渓は徳丸原操練を実際に見学していたのである。しかも盤渓は、徳丸原操練を見学した後、自ら江川門人となって高島流西洋砲術を修得し、仙台藩に西洋砲術を普及させた人物であった。そのような盤渓の後継者となって、同藩の西洋砲術指南役を勤めたのが『新撰洋学年表』の編者である如電であった。

同書に収録された「徳丸原銃隊調練人名」には、冒頭に「身分肩書略之」との注記が施されてはいるが、「徳丸原銃隊調練」に参加した高島門人―出府前の長崎における門人四十一名と、江戸出府後の入門者五十六名の合計九十七名の姓名が記載されている[12]。

なお、付言しておくと、前記の『陸軍歴史』所収の「徳丸原調練業書」における「小筒打方　九十九人」という員数には、塾主である高島秋帆とその嫡男の浅五郎が含まれている。その数に、「野戦筒三連　但し、一連四人ずつ　高島四郎太夫門人　十二人」を加えると合計百十一人となる。だが、その数字はあくまでも延べ員数であり、当日、操練に参加した高島門人の実数では決してない。この事実を見落とすと、門人数の計算に誤りを生じてしまう。すなわち、徳丸原での操練では、「鉄砲備打」「野戦筒三連」「小筒打方」という三種の操練の全てに参加した門人と、どの演目かには参加しなかった門人とが存在した、という事実の認識が極めて重要なこととなる。したがって、下記の大槻編『新撰洋学年表』に記された「徳丸原銃隊調練人名」の合計九十七名という門人名は、高島父子を除いた門人の実数を示したものと理解してよい。したがって、高島父子を加えれば、『陸軍歴史』所収の「徳丸原調練業書」の「九十九人」という員数と合致する。

「　徳丸原銃隊調練人名　身分肩書略之　五十音順姓名列記

小銃二小隊	ゲェール銃	燧火剣付　一伍三人	
野戦砲三門	カノオン砲	車台　砲手各四人	
浅井理三郎	荒木千洲	市川　登	上原百馬
衣幡与市	大木藤四郎	大田梁平	大山善右衛門
加藤淳大夫	木下勇之助	北川庫助	城戸治八
久米井安蔵	小島金蔵	小林文蔵	近藤雄蔵
近藤権蔵	斉藤助之助	斉藤免毛橘	品川梅次郎
竹内吉郎	高橋昇蔵	柘植長次郎	柘植栄之助
楢林長十	楢林嘉平	西田賢吾	野口善大夫
野口勘太	春　禎助	坂東孫兵衛	福田秋太
三原愛次郎	三橋源平	山本清太郎	横川喜三右エ門
井上孝蔵	井上蔵作	小坂道之助	小川喜代治
尾上藤之助			

以上四十一人長崎方にての門人

秋元宰助	秋山粂蔵	有坂鷹助	有馬淳蔵
安倍源三部	市川熊男	市川貞吉	伊藤　清

岩島千太　出谷春馬　大原安兵衛　大原俊七
河津孝之助　河津鋌三郎　柏木総蔵　金子竹四郎
金沢求馬　兼松繁蔵　桐山弥助　久保忠四郎
工藤久平　近藤彦八郎　斉藤三九郎　斉藤弥九郎
須田三弥助　関根伝次　黒部六左エ門　田瀬速水
谷　熊次郎　高木茂左エ門　滝田岩之助　塚本小八郎
富山岩之助　長淵藤三郎　丹羽作兵衛　野村鉄次郎
野村鎌之助　馬場斧三郎　伴　鉄吉　平山淳左エ門
藤田右源太　堀　覚三　牧野平馬　牧野楠之助
村山定平　元川六兵衛　山田熊蔵　山本小平
山本鉄三郎　吉井七郎　吉野英臣　井上彦四郎
小野金五郎　小川正右エ門　岡田万蔵　斧野熊次郎
以上五十六人江戸ニ来ての門人」

(3) 遠藤早泉『高島秋帆』所収の門人史料二件

①史料「天保十二年五月九日於武州徳丸原西洋砲術業書」

大槻編『新撰洋学年表』の刊行後に出された遠藤早泉『高島秋帆』（健文社、一九四二年）には、[13]『新撰洋学年表』の内容をはるかに凌ぐ精緻さをもって、徳丸原操練に参加した高島門人名を記録した史料二件が紹介されている。

まず、同書に収録された第一の史料は、「天保十二年五月九日於武州徳丸原西洋砲術業書」[14]というものであり、そこには操練に参加した高島門人の演目別員数が、次のように記されている。

「○天保十二年五月九日於武州徳丸原西洋砲術業書

壱番　モルチール筒ニ而ボンベン玉仕掛打　但八丁目印小旗建之　高島四郎太夫　同人伜　高島　浅五郎

弐番　同筒ニ而焼打玉　高島四郎太夫

参番　高島　浅五郎

四番　高島四郎太夫

五番　ホーイッスル筒ニ而小型ボンベン玉仕掛打　但八丁目印同断　浅五郎

六番　四郎太夫

七番　同筒ニ而数玉　浅五郎

八番　馬上砲　往返二筋　長崎地役人　近藤　雄蔵

鉄砲備打　高島四郎太夫門人九十七人

右下知　高島四郎太夫

高島　浅五郎

野戦筒三連　一連四人ツ、　高島四郎太夫門人　十二人

小筒打方　右同断　九十九人」

上記の「鉄砲備打」の「高島四郎太夫門人九十七人」もまた、下知役の高島父子の二名分を除いた数であり、したがって高島父子を加えれば九十九人となり、前記の『陸軍歴史』所収の「徳丸原調練業書」、および大槻編『新撰洋学年表』の場合と一致するものである。

さらに同史料には、上記の記述に続いて「部署並に見分の役々」[15]が記録されており、そこには徳丸原操練を見分した幕閣や大名・旗本たちを筆頭に、操練に参加した高島門人たちの個人名と一部門人の出身地とが、次のように記されている。

「

按察使　水野　舎人
知　砲　井上左太夫
　　田付四郎兵衛
徒士監　某　〃
与　力　某　〃
内　使　後藤周防守
　　吉川　一学
　　本多伊勢守
　　酒井出雲守
　　稲葉兵部少輔
　　稲垣若狭守
　　加納遠江守
　　堀　若狭守
　　加納大和守
　　太田新六郎
　　松平内匠頭
　　石河美濃守
前肥前守　松平　静山

第一隊長　高島四郎太夫
　副長　市川　熊男（江戸）
第二隊長　高島浅五郎
　副長　野口善太夫
　遊副長　山本清太郎
　　近藤　雄蔵（騎馬）
三門車砲　四　人
使捌杖者　拓植長次郎
　　春　積助
　　加藤淳太夫
投火薬者　工藤　久平（江戸）
　　斉藤弥九郎
　　田土部六衛門
点火者　小野金三郎
　　北川　庫助
　　有坂　淳蔵（防州）
挿火線並圧火明　大木藤四郎
　　福田　秋太
　　兼松　繁蔵（総州）
事後運薬者　尾上藤之助
　　楢林　嘉平
　　島田総兵衛
両隊銃士　河津孝之助（江戸）
　　河津逢之助
　　野林鉄二郎
　　野村鎌之助
　　高木茂左衛門
　　谷　熊次郎
　　芹沢繁二郎
　　山本鉾三郎
　　市川　貞吉
　　堀　覚三
　　斉藤助之進
　　市川　登
　　斉藤　兎毛

井上　孝蔵
小林　文蔵
久迷井安蔵
小島　金蔵
坂東孫兵衛
小野道之助
衣幡　与一
牧野　平馬（上野）
牧野恂之助
瀧田岩之助
須田三弥助（肥前）
馬場斧三郎
伊東　清（備中）
井下彦四郎（防州）
有坂　隆助
太田　梁平
柏木　荘蔵（豆州）
斉藤三九郎
山田　熊蔵
岡田　万蔵
岩島　千吉
秋山久米蔵
大原安兵衛
大原　俊七
小川　昌吉（江戸）
竹内卯吉郎（長崎）
野口　勘太

大木藤三郎
木下勇之助
浅井理三郎
上原　百馬
三橋　源平
大山善左衛門
高須　昇蔵
出谷　春馬
吉野　英臣（水府）
近藤彦八郎
高山岩之助
久保忠四郎
金子竹四郎
関根　伝次
藤田右源太
金沢　求馬
吉井　七郎（薩州）
相良弥之助
伴　鉄太郎
山本小弥太
塚本力八郎（芸州）
丹羽作兵衛（肥前）
永洲藤五郎
平山醇左衛門
秋元　宰助（遠州）
村上　定平（参州）
安信源三郎（越前）

田瀬　速水
荒木　千州
品川梅二郎
城戸　治八
横川喜野右衛門
西田　堅吾
楢林　長重
三原愛一郎
井上　東作
拓植栄之助
小川喜代次
下曽根金三郎
松平　内記
別所内蔵之助
高橋　栄蔵
江川太郎左衛門（豆州）
小波　軍平（予州）
遠藤　圭介（紀州）　」

留守厳内周旋執行者

②史料「高島秋帆翁試砲于江府図記」

さらに同書に収められた第二の史料としては、「荒木千州」という徳丸原操練に参加していた高島門人（長崎地役人）が描いたという「徳丸原試砲図」（同書の刊行時には、坂勉氏蔵で東京九段の「遊就館」に陳列されていたと、同書に明記）である。同図には、徳丸原操練に参加した門人高弟の山本晴海と大田梁平の両名による「高島秋帆翁試砲于江府図記」[16]という撰文が紹介されている。その中には、操練当日、見分役などで臨席した幕閣その他の人々と、操練に参加した高島門人の氏名（一部、出身地名を付記）とが記録されている。したがって、そこに記載された人名は、当日の操練における役割上から、次のごとく三種類に区分けすることができる。

□見分その他の幕府・大名関係者（十八人）

按察使水野舎人、知砲井上左太夫、田付四郎兵衛、徒士監某々　与力某々、内使後藤周防守、吉川一学、本多伊勢守、酒井出雲守、稲垣兵部少輔、稲垣若狭守、加納遠江守、堀若狭守、加納大和守、太田新六郎、松平内匠頭、石河美濃守、前肥前守松浦静山

□操練参加の高島門人（九十九人）

第一隊長高島四郎太夫源茂敦、副長、江戸、市川熊男、第二隊長高島浅五郎源敦武、副長野口善太夫、遊副長山本清太郎、騎馬近藤雄蔵、使搦杖者柘植長次郎、春積助、加藤淳太夫、投火薬者、江戸、工藤久平、斉藤弥九郎、水府田土部六衛門、点火者、江戸、小野金三郎、北川庫助、防州有坂淳蔵、挿火線并圧火門者、大木藤四郎、福田秋太、総州兼松繁蔵、車後連薬者、尾上藤之助、楢林嘉平、島田総兵衛、両隊銃手、江戸、河津孝之助、河津鏟三郎、野林鉄二郎、野村鎌之助、高木茂左衛門、谷熊次郎、芹沢繁二郎、山本鉾三郎、市川貞吉、堀覚三、斉藤助之進、市川登、斉藤兎毛、井上孝蔵、小林文蔵、久迷井安蔵、小島金蔵、坂東孫兵衛、小野道之助、衣幡与一、三橋源平、大山善左衛門、高須昇蔵、出谷春長、水府吉野英臣、近藤彦八郎、富山岩之助、久保忠四郎、金子竹四郎、関根伝次、藤田右源太、金沢求馬、薩州吉井七郎、相良弥之助、伴鉄太郎、山本小弥太、芸州塚本小八郎、肥前丹羽作兵衛、永洲藤五郎、平山醇左衛門、遠州秋元宰助、参州村上定平、越前安倍源三郎、田瀬速水、上野牧野平馬、牧野恂之助、瀧田岩之助、肥前須田三弥助、馬場斧三郎、備中伊東清、防州井下彦四郎、有坂隆助、大田梁平、豆州柏木荘蔵、斉藤三九郎、山田熊蔵、岡田万蔵、岩島千吉、秋山久米蔵、大原安兵衛、大原俊七、江戸小川昌吉、長崎竹内卯吉郎、野口勘太、大木藤三郎、木下勇之助、浅井理三郎、上原百馬、荒木千州、品川梅二郎、城戸治八、横川喜野右衛門、西田堅吾、楢林長重、三原愛二郎、井上東作、柘植栄之助、小川喜代次

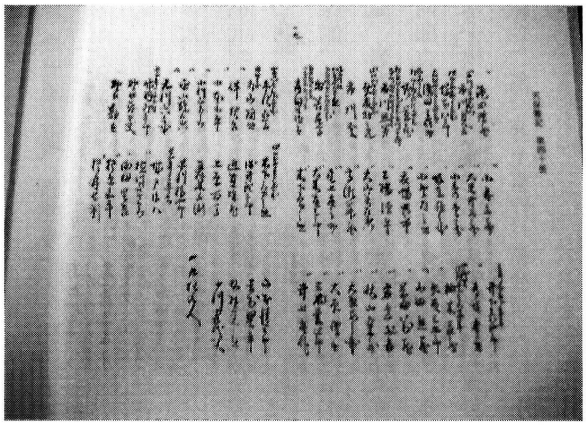
□留守廠内周旋執事者（七人）
江戸下曽根金三郎、松平内記、別所内蔵之助、高橋栄格、豆州江川太郎左衛門、予州小波軍平、紀州遠藤圭介

上記の史料の中で、操練に参加した高島門人は「九十九人」を数えるが、そこには高島父子が含まれており、したがって参加者の総計は、これまでに紹介した三種類の史料に記された員数と一致するものである。

(4) 『天保雑記』所収の「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」

次に紹介する内閣文庫蔵『天保雑記』とは、江戸後期の著名な剣士であった藤川貞（整斉、一七九一―一八六二）の自筆稿本と推定される史料である。[17] 実は、同稿本は、他の『文政雑記』『弘化雑記』『嘉永雑記』『安政雑記』の四編とともに遺された史料で、全体では五種類ある『雑記』の内の一つである。全五十六冊からなる『天保雑記』には、天保二年（一八三一）から同十五年（一八四四）の間の、武家を中心とした当時の社会や世相を物語る幅広い諸々の記録や見聞が、年代順に記録されている。その第四十冊の中に、二カ所、すなわち六番目の記事として「天保十二年五月九日武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」が、同じく十六番目に「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」という二件の史料が収められている。[18]

以上のような『天保雑記』に記載された、高島一門による武州徳丸原での西洋砲術操練に関する史料は、すでに洋学史研究に開拓的業績を遺された前述の佐藤昌介が、『洋学史の研究』の第一章「高島流砲術の創始と高島秋帆処罰事件」の中の注記において、後者の「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」の史料名のみを記され、その存在を紹介されている。[19] だが、管見の限りでは、『天保雑記』に収められた高島一門の砲術操練に関する同史料は、一般的には、ほとんど知られていない貴重な史料である。それ故、次に同史料の全文を紹介しておく。



まず、前述の『天保雑記』に収録された史料の最初のものは、「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」という記録である。同記録には、徳丸原操練に参加した高島門人の全体は記されておらず、当日の操練の概要を紹介した極めて簡潔な内容となっている。

「天保十二年五月九日
武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書

モルチール筒ニ而ボンベン玉仕掛打
但八丁目印小旗建之

壱番　諸組与力格　長崎会所調所頭取　高島四郎太夫
弐番　同人伴　同町年寄見習　高島　淺五郎
三番　高島四郎太夫

同筒ニ而焼打玉

但八丁目印同斷

四番　淺五郎
五番　四郎太夫
六番　淺五郎
七番　四郎太夫
同筒ニ而數玉
八番　淺五郎
馬上砲　往返二筋　長崎地役人　近藤　權蔵（ママ）
鐵砲備打　四郎太夫門人　九十七人
但変化之儀者場所□□ニ随ひ八九通りも相変不申候
右下知　四郎太夫
淺五郎

野戦筒三連　但、一連四人ツヽ、　高島四郎太夫門人十二人
小筒打方　同　九十九人」

以上が、最初の史料である。残るもう一件の史料は、「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」という、操練実施の日付（「天保十二年五月九日」）のないものである。だが、こちらの記録には、当日の操練に参加した高島門人の姓名が、身分や主家名などの肩書きを付して記録されている。

「　武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書

モルチール筒ニ而ボンベン玉仕掛打
但八丁目印小旗建之
一　壱番　弐拾六間後切弐拾七間三尺越　能焼申候　高島四郎太夫
一　弐番　弐間後切弐拾五間越　能焼申候　高島　淺五郎
一　三番　六間後切壱丁越　能焼申候　高島四郎太夫
同筒ニ而焼打玉

但八丁目印同斷

一　四番　四拾間後切壱丁弐拾間四尺落　能焼申候　高島　淺五郎
一　五番　四十二（ママ）間後切十四間落　能焼申候　高島四郎太夫
ホーイツスル筒ニ而小形ボンベン仕掛横打
但八丁目印小旗建之
一　六番　真通り二丁程越川江入玉知レ不申　導火通不申候　高島　淺五郎
一　七番　凡二間後切壱丁程越着　能焼申候　高島四郎太夫
同筒ニ而數玉　但四丁目印建之
一　八番　四丁ヨリ七丁之間能散着申候　高島　淺五郎
一　馬上砲　往返二筋　長崎地役人　近藤　雄蔵
一　鐵砲備打
但変化之儀者場所□様ニ随ひ八九通りも相変不申候事
下知方　高島四郎太夫
高島　淺五郎

野戦筒　右大将様奥醫師桃弘院三男　小野金三郎
御留守居松平内匠頭家来　工藤　久平
長崎御役所附　大木藤四郎
長崎地役人　拓植長四郎
野戦筒　水戸殿家来　田土部六右衛門
吉川尚五郎家来　有坂　淳蔵
長崎地役人　春　禎助
同　福田　秋太
野戦筒　堀田備中守殿家来　兼松　繁蔵
田口加賀守家来　北川　庫助
御代官江川太郎左衛門家来　齋藤弥九郎
長崎地役人　加藤淳太夫

小筒打方

清水殿御附河津三郎兵衛惣領　河津孝之助
門人市川熊男取立
同三男　河津鋌三郎
水戸殿家来　吉野　英臣
同　近藤喜八郎
同　冨山岩之助
同　久保忠四郎
同　金子竹四朗
同　関根　傳次
松平左京亮家来　前同断　牧野初之助
大御番頭戸田淡路守組与力　野村鉄次郎
同　同　鎌之助
同　高木茂左衛門
同　谷　熊次郎
西丸御書院番頭河野口津守組与力　芹沢繁次郎
御支配戸塚備前守組　山本鉢三郎
水野越前守殿家来　秋元　宰助
田口加賀守家来　斎藤　兎毛
同　井上　孝蔵
松平大隅守家来　吉川　七郎
松平肥前守家来　丹羽作兵衛
同　永渕藤五郎
三宅土佐守家来　村上　定平
酒井九馬尉家来門人市川熊男取立　阿部源三郎
同　同断　田瀬　速水
松平左京亮家来同断　牧野　平馬
牧野角五郎家来同断　馬場斧三郎

板倉周防守家来同断　伊東　清
同　同断　滝田　錬蔵
市川一学厄介　同断　市川　貞吉
松平安芸守家来　塚本　八郎
大村丹後守家来　須田三保助
松平内匠頭家来　堀　覚蔵
松平左京亮家来市川一学倅
当時田口加賀守家来　市川　熊男
田口加賀守家来　斎藤助之進
同　市川　登
御小姓組加藤伊勢守組
下曽根金三郎家来　出谷　春馬
水戸殿内山遊兵庫家来　藤田右源太
同　金沢　直馬
内弟子　相山　弥助
同　伴　鉄吉
同　山本　小平
同　小川正左衛門
同　平山淳右衛門
同　元川六兵衛
長崎御役所附　竹内卯吉郎
同　野口善太夫
同　野口　勘太
同　小林　文蔵
同　久米井安蔵
同　小島　金蔵
同　坂東孫兵衛

同　小野道之助
同　衣橋　與一
同　三橋　源平
同　大山善左衛門
同　高瀬　昇蔵
同　尾上藤之助
同　大木藤三郎
同　木下勇之助
田口加賀守家来（重）　木下勇之助
同　浅井理三郎
同　近藤　権蔵
同　上原　百馬
同　荒木　千洲
同　品川福四郎
長崎ヨリ召連候者
同　城戸　治八
同　横川喜之三衛門
同　西田　堅吾
同　楢原　嘉平
同　楢井　長重
吉川尚五郎家来　井下彦四郎
同　有坂　鷹助
御代官江川太郎左衛門家来　柏木　荘蔵
同　齋藤弥九郎
同　山田　熊蔵
同　岡田　萬蔵
同　岩島　千吉
同　秋山　粂蔵
同　大原安兵衛
同　大原　俊七
同　三原愛次郎
同　井上　藤作
長崎ヨリ召連候者
同　山本清太郎
同　吉前（大田梁平カ）　果平
同　拓植栄之助
同　小川喜代次
〆九十九人」

以上が、『天保雑記』に収録された「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」という史料の内容である。そこにおいて、当日の操練に参加した高島門人は、合計九十九名とされている。だが、実際に史料に記された参加者の延べ人数は、高島父子を含めると百名、父子を除くと九十八を数える。何故に百名を数えるのか。実は、同史料には、同一人物の重複記載（「長崎御役所附木下勇之助」と「田口加賀守家来木下勇之助」）が認められるからである。したがって、これら二名の重複を除いた参加門人の実数は、史料の末尾に記された通りの「〆九十九人」となる。

なお、以上のような内容の『天保雑記』に収録された史料「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」を解読した結果、判明した記載門人の氏名を五十音別に整理して一覧表で示すと次のようになる。

図表1　『天保雑記』記載の高島門人一覧

	氏名		操練役務	門人内訳	帰属身分
1	高島四郎太夫		下知方		
2	高島浅五郎		下知方		
3	相山　弥助		小筒打方	内弟子	
4	秋元　宰助		小筒打方		水野越前守殿家来
5	秋山　粂蔵		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
6	浅井理三郎		小筒打方		田口加賀守家来
7	阿倍源三郎		小筒打方	門人市川熊男取立	酒井九馬尉家来
8	荒木　千州		小筒打方		田口加賀守家来
9	有坂　淳蔵		野戦筒		吉川尚五郎家来
10	有坂　鷹助		小筒打方		吉川尚五郎家来
11	井下彦四郎		小筒打方		吉川尚五郎家来
12	市川　熊男		小筒打方		松平左京亮家来市川一学倅、当時田加賀守家来
13	市川　貞吉		小筒打方		市川一学厄介
14	市川　登		小筒打方		田口加賀守家来
15	出谷　春馬		小筒打方		御小姓組下曽根金三郎家来
16	伊東　清		小筒打方	門人市川熊男取立	板倉周防守家来
17	井上　孝蔵		小筒打方		田口加賀守家来
18	井上　藤作		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
19	衣橋　与市		小筒打方	内弟子	
20	岩島　千吉		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
21	上原　百馬		小筒打方		田口加賀守家来
22	大木藤三郎		小筒打方	内弟子	
23	大木藤四郎		野戦筒		長崎御役所附
24	大原　俊七		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
25	大原安兵衛		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来

26	大山善左衛門		小筒打方	内弟子	
27	岡田　万蔵		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
28	小川喜代次		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
29	小川正左衛門		小筒打方	内弟子	
30	小野金三郎		野戦筒		右大将様奥医師桃仙院三男
31	小野道之助		小筒打方	内弟子	
32	尾上藤之助		小筒打方	内弟子	
33	柏木荘蔵		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
34	加藤淳太夫		野戦筒		長崎地役人
35	金沢　直馬		小筒打方		水戸殿内山之部兵庫家来
36	金子竹四郎		小筒打方		水戸殿家来
37	兼松　繁蔵		野戦筒		堀田備中守殿家来
38	河津鋌三郎		小筒打方	門人市川熊男取立	清水殿御附河津三郎兵衛三男
39	河津孝之助		小筒打方	門人市川熊男取立	清水殿御附河津三郎兵衛御惣領
40	北川　庫助		野戦筒		田口加賀守家来
41	城戸　治八		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
42	木下勇之助	重複記載	小筒打方		田口加賀守家来
43	工藤　久平		野戦筒		御留守居松平内匠頭家来
44	久保忠四郎		小筒打方		水戸殿家来
45	久米井安蔵		小筒打方	内弟子	
46	小島　金蔵		小筒打方	内弟子	
47	小林　文蔵		小筒打方	内弟子	
48	近藤喜八郎		小筒打方		水戸殿家来
49	近藤　権蔵		小筒打方		田口加賀守家来
50	斉藤三九郎		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
51	斉藤助之進		小筒打方		田口加賀守家来
52	斉藤　兎毛		小筒打方		田口加賀守家来

53	斉藤弥九郎		野戦筒		御代官江川太郎左衛門家来
54	品川福四郎		小筒打方		田口加賀守家来
55	須田三保助		小筒打方		大村丹後守家来
56	関根　伝次		小筒打方		水戸殿家来
57	芹沢繁次郎		小筒打方		西丸御書院番頭河野□津守組与力
58	高木茂左衛門		小筒打方	門人市川熊男取立	大御番頭戸田淡路守組与力
59	高瀬　昇蔵		小筒打方	内弟子	
60	滝田　錬蔵		小筒打方	門人市川熊男取立	板倉周防守家来
61	拓植栄之助		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
62	拓植長四郎		野戦筒		長崎地役人
63	竹内卯吉郎		小筒打方	内弟子	長崎御役所附
64	田瀬　速水		小筒打方	門人市川熊男取立	酒井九馬尉家来
65	田土部六右衛門		野戦筒		水戸殿家来
66	谷　熊次郎		小筒打方		大御番頭戸田淡路守組与力
67	塚本　八郎		小筒打方		松平安芸守家来
68	冨山岩之助		小筒打方		水戸殿家来
69	永渕藤五郎		小筒打方		松平肥前守家来
70	楢井　長重		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
71	楢原　嘉平		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
72	西田　堅吾		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
73	丹羽作兵衛		小筒打方		松平肥前守家来
74	野口　勘太		小筒打方	内弟子	
75	野口善太夫		小筒打方	内弟子	
76	野村鎌之助		小筒打方	門人市川熊男取立	大御番頭戸田淡路守組与力
77	野村鉄次郎		小筒打方	門人市川熊男取立	大御番頭戸田淡路守組与力
78	伴　鉄吉		小筒打方	内弟子	
79	馬場斧三郎		小筒打方	門人市川熊男取立	牧野角五郎家来

80	春　禎助		野戦砲		長崎地役人
81	坂東孫兵衛		小筒打方	内弟子	
82	平山淳左衛門		小筒打方	内弟子	
83	福田　秋太		野戦筒		長崎地役人
84	藤田右源太		小筒打方		水戸殿内山之部兵庫家来
85	堀　覚蔵		小筒打方		御留守居松平内匠頭家来
86	牧野初之助		小筒打方	門人市川熊男取立	松平左京亮家来
87	牧野　平馬		小筒打方	門人市川熊男取立	松平左京亮家来
88	三橋　源平		小筒打方	内弟子	
89	三原愛次郎		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
90	村上　定平		小筒打方		三宅土佐守家来
91	元川六兵衛		小筒打方	内弟子	
92	山田　熊蔵		小筒打方		御代官江川太郎左衛門家来
93	山本鎌三郎		小筒打方		小普請組与力
94	山本　小平		小筒打方	内弟子	
95	山本清太郎		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
96	横川喜之三衛門		小筒打方		長崎ヨリ召連之者
97	吉川　七郎		小筒打方		松平大隅守家来
98	吉野　英臣		小筒打方		水戸殿家来
99	吉前　梁平	大田梁平（カ）	小筒打方		長崎ヨリ召連之者

(二) 先行研究における徳丸原操練時の高島門人

(1) 佐藤昌介の場合

高島一門による武州徳丸原での西洋砲術調練に関する既存の史料は以上のごとくであるが、江戸後期、特にアヘン戦争や黒船来航という出来事が勃発する幕末期の洋学史研究に関しては、はやくから「洋学の軍事科学化」という独自の視座と見解をもって顕著な研究業績を残した佐藤昌介は、幕末洋学史研究における軍事科学の変化、すなわち西洋砲術の受容という歴史的現象の重要性にいち早く着目した研究者であった。その彼が、高島秋帆の武州徳丸原での西洋

砲術操練を取り上げている。

まず佐藤は、洋学史研究に関する最初の研究成果として刊行した『洋学史研究序説』において、「徳丸原に参加したもの九十九人のうち、江戸での門人は五十名余りに上っている。」[20]と述べている。佐藤の、このような門人数の記載は、有馬成甫蔵「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」という史料が根拠とされているが、現在では同史料の所在は不明で、確認することはできない。だが、「五十名余り」という記述は極めて漠然とした表現である。これとほぼ同様の記載が、前述の大槻如電編『新撰洋学年表』の「徳丸原銃隊調練人名」にあり、そこでは「以上五十六人江戸ニ来ての門人」と記されている。[21]

ところで、その後、さらに洋学史研究を進めた佐藤は、その研究成果を『洋学史研究序説』の続編に相当する『洋学史の研究』にまとめ、これを刊行した。[22]そこでは、前著の課題であった徳丸原演練に参加した高島門人について、その後の調査結果を踏まえて、より詳細な、次のような叙述がなされている。

> 徳丸ヶ原の演練に参加した高島の門人は、野戦筒打方一二人、小筒打方九九人、計一一一人であるが、全員の氏名と身分は、現在のところ、正確にはわかっていない。判明しているものだけについてみると、幕臣・諸藩士（陪臣を含む）、長崎地役人、高島の内弟子、随行者に分けられる。幕臣・諸藩士について、おおよその数を示すと、つぎの通りである。まず幕臣は、前長崎奉行田口喜行の家来一五人、代官江川英竜の家臣一〇人、長崎奉行所附五人を除くと、九人で、かれらはおおむね与力級の下級幕臣である。なおこれに旗本の家臣を加えれば、一一人となる。かれらは江戸で高島の門人となったものと推定される。つぎに諸藩士は十三の藩にわたり、総数は三〇人である。別表は藩名と人数を示したものである。これらのうち、岩国藩士は有坂淳蔵およびその二子であり、また佐賀藩士三人のうち、一人は鍋島十左衛門の家来平山醇左衛門で、有坂も平山も長崎での門人である。かれらを除く、他の諸藩士は江戸での門人と推定される。とくに水戸の藩士に多いのは、同藩に高島流砲術が伝播するのがこのころであることを推知させよう。なおついでながら、長州藩のばあい、同藩の天保改革の推進者村田清風が参勤の藩主に随行して、江戸に滞在中、徳丸ヶ原演練のことを知り、藩士藤井平左衛門に命じて高島の門に入らせ、高島の帰国後、粟屋翁助・郡司源之允（ママ）を長崎に派遣し、長崎聞役井上与四郎とともに、高島に入門させている。長州藩が西洋砲術を採用するのは、これ以来のことである。[23]

ところで、上記の引用で特に注目すべき問題点は、徳丸原操練に参加した高島門人の員数についてである。佐藤は、前著『洋学史研究序説』では「九十九人」と記したが、続編の『洋学史の研究』では「野戦筒打方一二人、小筒打方九九人、計一一一人」と訂正している。はたして、どちらの数字が正しいのか。すでに、既存史料の紹介において、筆者は、徳丸原操練に参加した高島門人の総数を「九十九人」と述べてきた。では、何故に佐藤は、「一一一人」と訂正したのか。この問題を解明するには、当日、操練に参加した高島門人の特定をする必要がある。その詳細な作業結果については後述するが、結論的にいえることは、「計一一一人」としたことは、「野戦筒打方一二人」と「小筒打方九九人」とを単純に合算してしまったことに起因するとみてよい。実際には、当日の操練においては、「野戦筒打方」と「小筒打方」の操練には、同一門人が重複して役割分担していたことは明らかであり、この点を看過したが故に発生した計算ミスの問題といえるであろう。

(2) 栗原隆一の場合

栗原の著書『幕末日本の軍制』[24]には、「幕閣は江川の意見をいれ、秋帆の出府を促した。天保十二年（一八四一）五月、秋帆とその弟子百数十人は江戸城の西三里、武州徳丸ケ原において洋式銃陣の操練をおこない、幕府首脳部の検分に供した。」と記され、さらに、その具体的な内容については、幕末期に幕臣として蘭学を修めた長崎出身の福地源一郎（桜痴、一八四一―一九〇六）が「少

年読本」として著した『高島秋帆』から、次のように引用している。

秋帆は一子浅五郎と門人を引きつれ総勢一二九人、所定の場所に整列した。門人はみんなが黒塗り円錐形の陣笠をかぶり、服装は黒筒袖の半纏に黒股引、黒脚半、紺足袋、わらじといった黒ずくめで、帯のうえを手綱でかたく締め、脇差一本をさして弾薬入れと銃剣、帯を腰につけた身軽な装束であった。(25)

上記の史料に記された「総勢一二九人」とは、一体、どのような史料的根拠に基づく門人数であるのか。当日の高島一門による徳丸原での西洋砲術操練には、①見分その他の幕府・大名関係者（十八人）、②操練参加の高島門人（鉄砲備打九十七人、野戦砲三連十二人、小筒打ち方九十九人）、③留守廠内周旋執事者（七人）という三種の人々が関わっていた。それらの内の①十八人（見分その他の幕府・大名関係者）と、②操練参加の高島門人の内の野戦砲三連の十二人と小筒打ち方の九十九人とを合計すると、確かに記載された数字の「一二九人」となる。だが、幾種類かの項目の数字の内から、なぜ、そのような項目を選択して合計したのか。何故に①を加算して、③を除外したのか。そして②の九十九人という員数は、十二人（野戦砲三連の員数）を含んだ合計であることが、誤認されているとみなければならない。したがって一二九人という数字は、全く根拠のないものであるといわざるをえない。

(3) 仲田正之の場合

仲田正之『韮山代官江川氏の研究』(26)には、高島一門の徳丸原操練の様子が、次のように叙述されている。

演練の日も間近にせまった五月七日、陪観の者に対して集合時刻・衣服・到着の報告などの規定が下達された。この日早朝、演練に参加する柏木惣蔵・山田熊蔵・岡田万蔵・斉藤三九郎・岩島千吉・秋山粂蔵・大原俊七（以上銃隊員）、斉藤弥九郎（砲隊員）が本所の江川屋敷を出発した。そして、同日秋帆以下全員が、徳丸原に隣接する豊島郡赤塚村の曹洞宗松月院に集合した。五月八日の予行演習からの参観を願い出ていた英龍は、前夜より支度をととのえ、子の刻（午前零時）赤塚村に向けて出発、予定の宿舎である徳丸脇村名主久蔵方を用いず、松月院に到着するや、そのまま秋帆と行動をともにした。

天保十二年（一八四一）五月九日、徳丸原の南隅には監察使・幕吏・諸侯用に幕舎五張が設けられ、部隊は西隅の幕舎に待機した。指揮官は高島秋帆、副官は高弟の市川熊男、第二隊長は秋帆の長男高島浅五郎で、銃隊九九人、砲隊二四人の編成である。(27)

これまでの本稿における先行研究の検証で明らかになったごとく、上記の「銃隊九九人、砲隊二四人の編成」という参加門人数の表記もまた問題とせざるをえない。はたして、「銃隊九九人」と「砲隊二四人」とは、重複のない別個の隊の実数を表記したものであるのか否か。もし、重複のない別々の実数であるとするならば、参加門人数の合計は「一二三人」ということとなり、これまた参加門人の総数とは異なる誤認の結果といわざるをえない。

以上、検討してきた先行研究には、高島一門による徳丸原での西洋砲術操練に関して、そこに参加した高島門人の員数を巡って、様々な数字が表記されてきた。そこで本稿では、問題の根本には、延べ員数と実数との誤認や混同という、史料理解に関する基本的な誤謬が存在することを確認してきたわけである。だが、さらに重要な点は、それぞれの史料自身に、参加した個々の門人数の相違や門人名表記の誤記が数多く認められるという事実である。この問題の解明をした上で、先行研究の問題点を整理して比較検討を加え、もって幕末期日本における西洋砲術の普及に開拓的な役割をはたした、徳丸原での西洋砲術操練に参加した高島門人を、可能な限り特定する必要がある。実は、従来の諸史料が内在する問題点を解明する上で有効と思われる史料として、次に高知県立図書館蔵「山内史料」所収の「高島流砲術」という新史料を紹介することと

する。

(三) 高知県立図書館蔵「山内史料」所収「高島流砲術」の紹介

先に紹介した四件の史料が、一般に知られている高島一門による徳丸原操練に関する既知史料であり、前述の先行研究は、それらの史料を、それぞれに用いてなされたものである。だが、これらの他にも、例えば後述する佐藤昌介『洋学史研究序説』で用いられたと明記されている有馬成甫蔵「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」[28]など、関係資料が存在する可能性は大きい。実は、その一つとして筆者が次に紹介したい新史料として、高知県立図書館蔵「山内史料」の中に収められた「高島流砲術」という史料がある。

なお、吉川弘文館の「人物叢書」に収められた有馬成甫『高島秋帆』(一九五八年)には、不思議なことに徳丸原操練の参加者に関する史料は全く記されておらず、したがって操練に参加した高島門人の全体像を窺い知ることはできない。

ところで、高知県立図書館が所蔵する、土佐藩主山内家が遺した史料「山内文庫」の中には、高島流砲術関係の史料が二点含まれている。すなわち『高島流砲術』(全一巻、天保一二年)と『和蘭陀流砲術書』(「和蘭陀火術録」全二巻、附録一巻、一八四七年に第十三代藩主山内豊熙(やまうちとよてる)が筆写)である。後者は、いわゆる高島流砲術の秘伝書の写本であるが、前者の『高島流砲術』は、「天保十二年五月九日武州徳丸原高島流砲術場備打変化左ノ通」という標題の下に、天保十二年五月九日、幕府公設の大砲実射稽古場であった武州徳丸原で実施された、高島一門による西洋砲術操練(洋式砲術操練と縦隊調練)の実況を検分した様子を克明に記録した貴重な史料である。この史料が存在するということは、土佐藩が、武州徳丸原での高島流砲術操練に強い関心を示し、藩士を派遣して当日の操練の実際を遺漏なく記録させていたことを物語っている。

この高島一門の徳丸原での西洋砲術操練については、前述のごとく、幕閣はもちろん、直参旗本の江川坦庵(太郎左衛門)や下曽根信敦(金三郎)、さらには幕閣の中でも老中首座で、天保改革を断行しようとしていた水野忠邦(浜松藩主)を筆頭に、水戸藩、岩国藩、佐倉藩、広島藩、松山藩、薩摩藩などの諸藩が、自分の家臣たちを、江戸に出府後の、いまだ操練前の高島秋帆の下に入門させ、しかも彼らは武州徳丸原での調練当日には、高島門人として操練に参加していたのである。

だが、土佐藩の場合は、残念ながら藩士を事前に高島の下に派遣して入門させるまでには至らなかった。しかしながら、早くから海防問題が重要な政治課題となっていた土佐藩では、第十三代藩主を襲封する直前の山内豊熙(とよてる)を筆頭に、高島一門の西洋砲術操練には強い関心を示していた。それ故に、操練当日には、江戸勤番の藩士二名を武州徳丸原に派遣し、高島一門による操練の実際を詳細に記録させていたのである。実は、そのときに記録した史料こそが、本稿が紹介しようとしている前述の『高島流砲術』であった。そして操練当日、武州徳丸原に派遣され、この『高島流砲術』を書き留めた藩士が、他ならぬ土佐藩「徳弘家資料」(高知市民図書館蔵)を遺した藩の西洋砲術師範を勤める徳弘孝蔵であった。[29]その証左として、彼が遺した「徳弘家資料」の中には、南画家でもあった彼自身が描いた「絵入り書簡　徳丸ヶ原ト云処へ」という史料が含まれている。[30]この史料には、高島一門による西洋砲術操練の実際を現地視察させるために派遣された藩士二名と従者一名の計三名が、武州徳丸原をめざす往路の旅姿が軽妙な筆致でリアルに描写されている。同書簡のスケッチに添え書きされた文章の内容は、下図のごとくである。

以上のような経緯を経て、土佐藩士の手で書写された、高島一門による徳丸原操練の実態を記録した史料が、高知県立図書館蔵「山内文庫」に納められて

いる『高島流砲術』である。この史料には、操練に参加した高島門人の氏名や帰属する主家名、操練当日の役割などが詳細に記載されており、先に紹介した四件の既存史料のどれよりも、はるかに史料的精度の高いものである。

実は、すでに本史料の存在に着目し、これを利用して、高島門人の藩別入門者の分析を試みられた先行研究が、前述の佐藤昌介『洋学史の研究』には収められている。同書「第二編　幕末洋学成立過程の研究」の「第一章　高島流砲術と高島秋帆処罰事件」における徳丸原操練に参加した高島門人の分析に用いた参考資料の「注記」には、次のように記されている。

本節で利用した参加者名簿は、『天保雑記』三九(ママ)所収のものと、高知県立図書館山内文庫蔵「高島流砲術」の記載で、後者を基に前者で補った。(31)

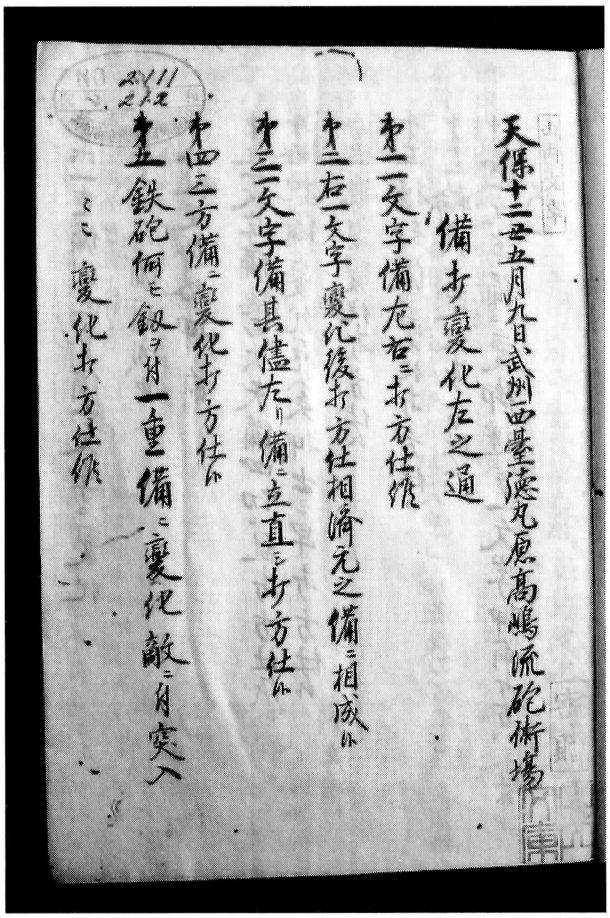
高島の徳丸原操練に関する史料の中で、本史料の存在と価値を最初に認識され活用された同氏の慧眼には敬服する。しかしながら、同書においては、本史料が、高島門人の藩別入門者の簡単な数量的分析に用いられただけで、同史料に記載された個々の高島門人の紹介や特定は全くなされていない。もちろん本史料によって、一定程度の藩別入門者の分析は可能ではある。だが、さらに、これまでに知られてきた徳丸原操練に関する各種の史料内容を、本史料と総合的に比較校合することによって、操練に参加した高島門人を吟味し特定することができ、その結果、徳丸原操練の実態解明が格段に進み、従来の誤謬に満ちた曖昧な理解や認識を刷新することが可能になるとみてよい。それ故に本稿では、まず資料的な重要性に鑑みて、次に同史料の全文を写真版で紹介し、その解読文を付記することとする。

□ヨリ徳丸カ原ト云処ヘ参候処、只広キ原ニテ道も無ク公義ノ御己屋ヲ漸見付参候事ニテ候。御上屋敷ヲ夜九時ニ立、夜明ニ一向休ナシニ参着申候。原ノサキカヤヲリ越テ船ノ帆見ユル故、未場所モ不明故参候処、何程大成川(ツ)ニテ園村ノ先生抔ハ船ニテ此原処ヘ参居リ候。夫ヨリ町撃(まちうち)相始リ折々下拙も先生ニ被雇玉先ヘ参候処、一向玉ハ如何致シ候テモカヤ（茅）ノ中ゆへ取れ不申候。火箭(ひや)ハ行ツキノクスリヲ見テ取リ申候。只々広キ原ト申モノハ木も無ク、少々アツサニタヘラレズヨリ□ヨリツムリ抔ノカハハゲ申様ノ事ニテ御座候。然共、珍敷事(めずらしきこと)ニテ大ニ相楽申候。徳丸カ原ヘ行道、夜道ニテ一向志らぬ道ニテ田の中やらかや（茅藁）ヘ出どふぞ。行ツケバヨイカト持候。

夫ゆへ野村ハアセヲなかしテユキ、ソレガシモ泣ヨリ漸道ヲ尋ネユキ、弁当持申候ハオヽリ（大利）此ケントヲ（見当）ヘユキ候ヘバ、ヨヲゴザリマショヲト云

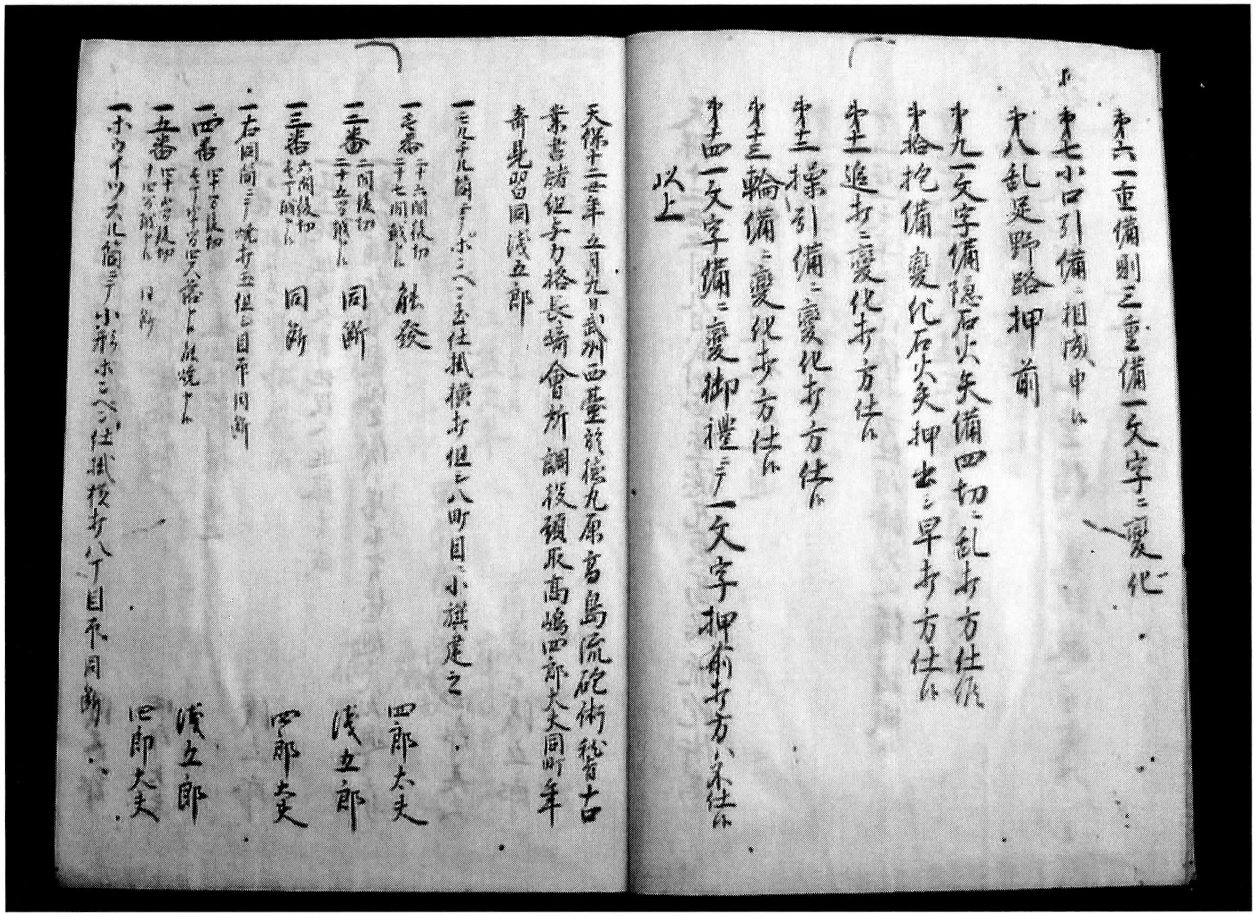
一向夜九時上屋敷ヲ出候ヨリ、休ミナシ、ヨヲヨヲ夜明ニ□テト云処ヘユキ、茶ヲ呑、人こヽチニナリ申候。夫ヨリ段々参候事ニテ有之候。よふ晴候ヘバ日光山見ユル□処ノ者申候。尚野村ヘ御聞可之有候

以上



「表紙　高嶋流砲術　全

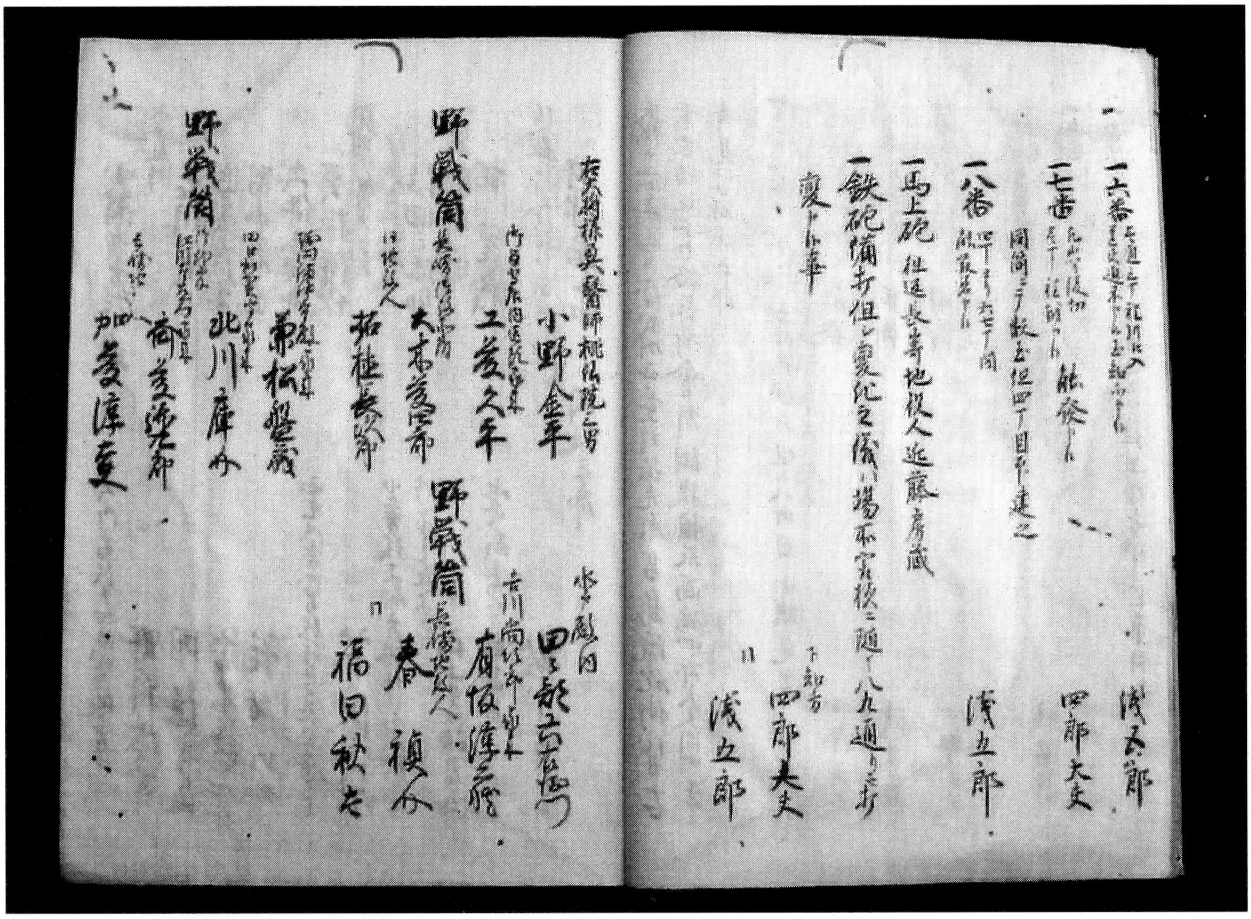
「天保十二丑五月九日武州西臺徳丸原高嶋流砲術場
備打變化左之通
第一一文字備左右ニ打方仕候
第二右一文字變化後打方仕相済元之備ニ相成候
第三一文字備其儘左リ備ニ立直シ打方仕候
第四三方備ニ變化打方仕候
第五鉄砲何モ釵ヲ付一重備ニ變化敵ニ付突入
々々變化打方仕候



「第六一重備則三重備一文字ニ變化
第七小口引備ニ相成申候
第八乱足野路押前
第九一文字備隠石火矢備四切ニ乱打方仕候
第拾抱備變化石火矢押出シ早打方仕候
第十一追打ニ變化打方仕候
第十二操引備ニ變化打方仕候
第十三輪備ニ變化打方仕候
第十四一文字備ニ變御禮ニテ一文字押前打方ハ不仕候
以上

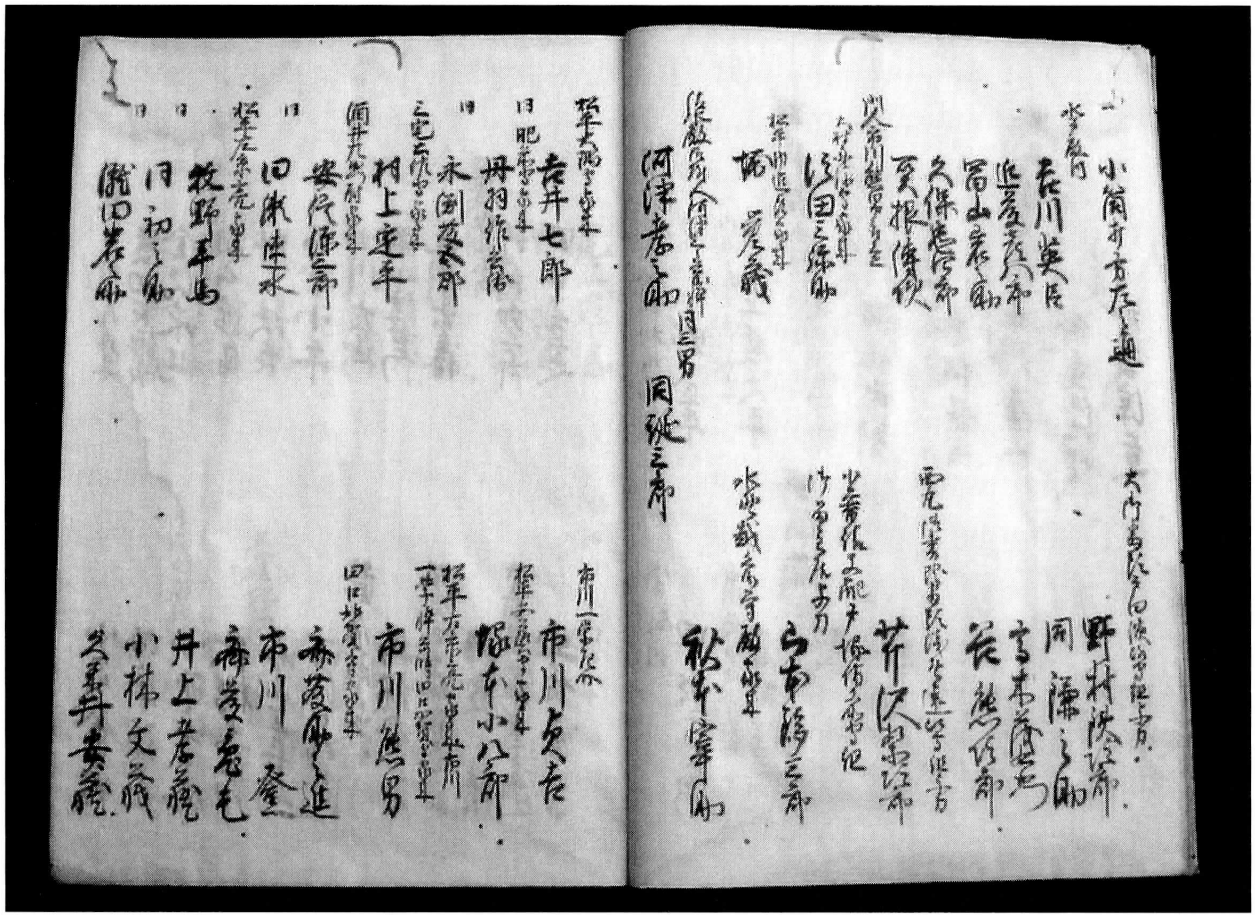
「天保十二丑年五月九日武州西臺於徳丸原高島流砲術稽古
業書諸組与力格長埼會所調役頭取高嶋四郎太夫同町年
（ママ）
奇見習同浅五郎

一モルチル筒ニテボンベン玉仕掛横打但シ八町目ニ小旗建之
一壱番　二十六間後切「二十七間越申候」　能發
一二番　二間後切「二十五間越申候」　同断
一三番　六間後切「壱丁越申候」　同断
一右同筒ニテ焼打玉但シ目印同断
一四番　四十間後切「壱丁弐十間四尺落申候能焼申候」　浅五郎
一五番　四十弐間後切「十四間越焼申候」　同断
一ホウイツスル筒ニテ小形ボンベン仕掛横打八丁目印同断



「一六番　壱通三丁程川江入
　導火通不申候玉知不申候　浅五郎
一七番　凡弐間後切
　壱丁程越申候　触發申候　四郎太夫
　同筒ニテ数玉但シ四丁目印建之
一八番　四丁ヨリ六七丁
　触發着申候　浅五郎
一馬上砲　往返長寄地役人　近藤房蔵
一鉄砲備打但シ變化之儀ハ場所□様ニ随イ八九通リモ打
　變申候事
　下知方　四郎太夫
　同　浅五郎

「右大將様奥醫師桃仙院三男　水戸殿内
　小野　金平　田々部六右衛門
　御留守居内匠頭家来　吉川尚次郎家来
　工藤　久平　有坂　淳蔵
野戦筒　長崎御役所附　野戦筒　長崎地役人
　大木藤四郎　春　禎助
　同地役人　同
　拓植長次郎　福田　秋太
　堀田備中守殿家来
　兼松　盤蔵
　田口加賀守家来
　北川　庫介
野戦筒　御代官江川太郎左衛門家来
　斉藤弥九郎
　長崎地役人
　加藤淳太夫



「一　小筒打方左之通

水戸殿内
吉川　英臣
近藤彦八郎
冨山岩之助（ママ）
久保忠四郎
関根　傳次

門人市川熊男之主
大村丹後守家来
須田三弥助

松平内匠頭家来
堀　覚蔵

清水殿御附人河津三郎兵衛倅
河津孝之助

同三男
河津鋌三郎（ママ）

「

松平大隅守家来
吉井　七郎

同　肥前守家来
丹羽作兵衛

同
永渕藤五郎（ママ）

三宅土佐守家来
村上　定平

酒井九馬尉家来
安倍源三郎

同
田瀬　速水

松平左京亮家来
牧野　平馬
同　初之助
瀧田岩之助

大門番頭戸田淡路守組与力
野村鉄次郎
同　鎌之助
高木茂左衛門
谷　熊次郎

西丸御書院番頭浅野遠江守組与力
芹沢繁次郎

小普請支配戸塚備前守組
御留守居与力
山本鉤三郎（ママ）

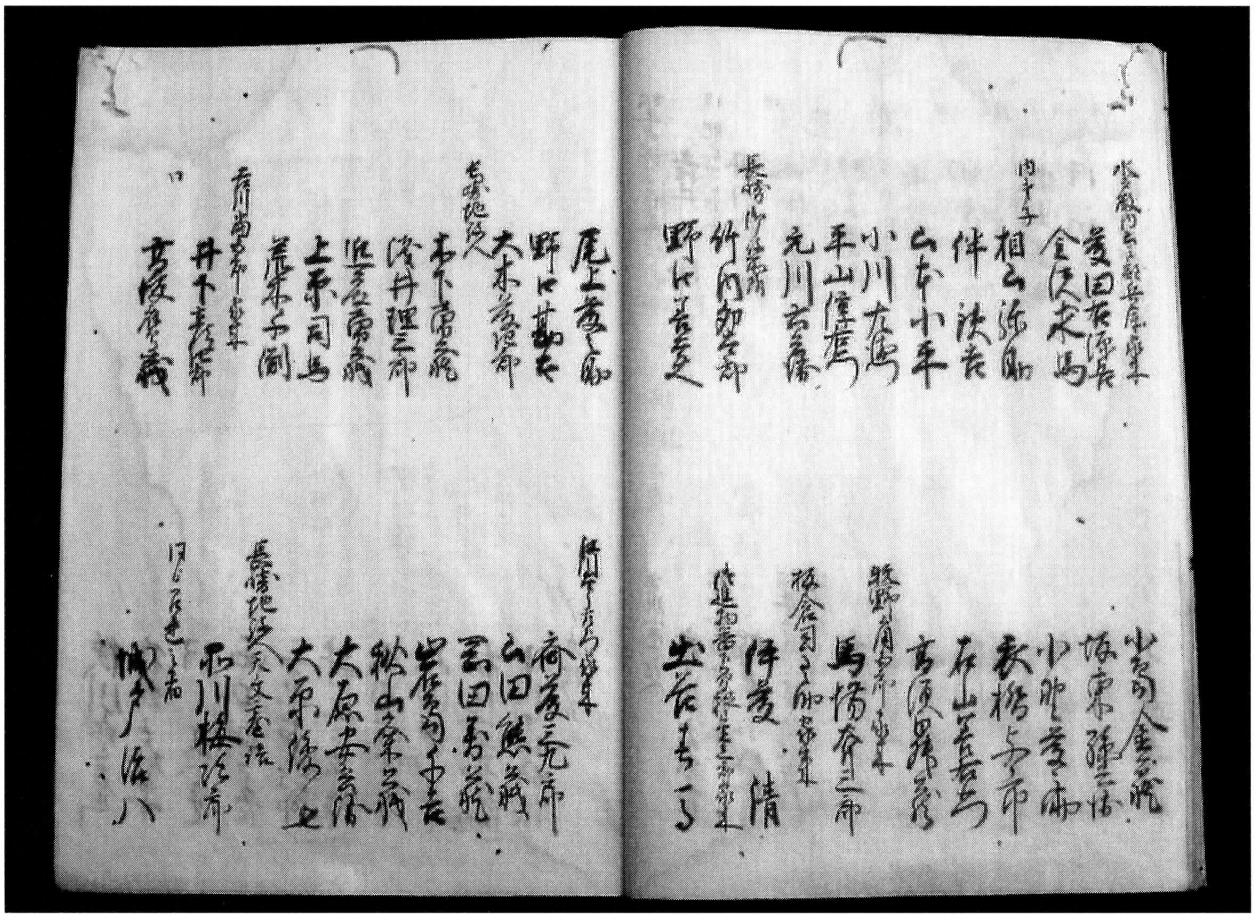
水野越前守殿家来
秋本（ママ）宰助

市川一学厄介
市川　貞吉

松平安芸守家来
塚本小八郎（ママ）

松平左京亮家来市川一学倅
其後田口加賀守家来
市川　熊男

田口加賀守家来
斎藤助之進
市川　登
斎藤　兎毛
井上　孝蔵
小林　文蔵
久米井安蔵



「

水戸殿内山之部兵庫家来

藤田右源吾
金沢　求馬

内弟子

相山（ママ）　弥助（ママ）
伴　鉄吉
山本（ママ）　小平（ママ）
小川（ママ）左衛門（ママ）
平山淳（ママ）右衛門（ママ）
元川（ママ）六兵衛（ママ）

長崎御役所附

竹内外太郎
野口善太夫

小島（ママ）　金蔵（ママ）
坂東孫兵衛
小野藤（ママ）之助
衣橋　与市
石山（ママ）善右衛門（ママ）
高須　昇蔵

牧野角（ママ）五郎家来

馬場斧三郎

板倉司之助家来

伊藤　清

御進物番下曽根金三郎家来

出谷　春馬

「

尾上藤之助
野口　勘太
大木藤（ママ）四郎

長崎地役人

木下　勇蔵（ママ）
浅井理三郎
近藤　勇蔵（ママ）
上原　司馬（ママ）
荒木　千洲

吉川尚五郎家来

井下彦四郎
高坂（ママ）　鷹蔵（ママ）

江川太郎左衛門家来

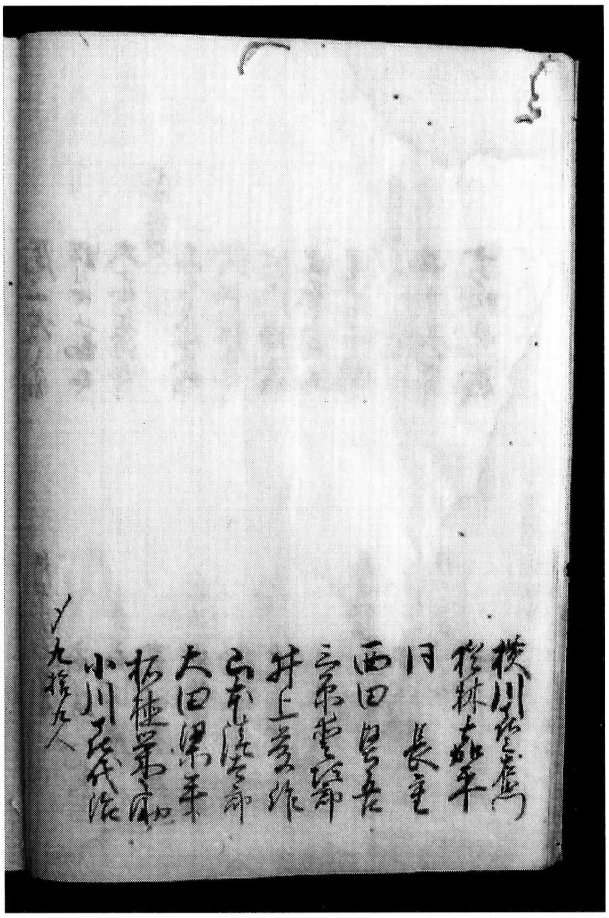
斎藤三九郎
山田　熊蔵
岡田　萬蔵
岩島　千吉
秋山　粂蔵（ママ）
大原安兵衛
大原　俊七

長崎地役人天文嘉詰

品川梅次郎（ママ）

同ヨリ召連之者

城戸　治八



「
横川喜三左衛門
楢林　嘉平
同　　長重
西田　堅吾
三原愛次郎（ママ）
井上　藤作（ママ）
山本清太郎
大田　梁平（ママ）
柘植栄之助
小川喜代次
〆九拾九人　」

㈣　高知県立図書館蔵「山内史料」所収「高島流砲術」の内容

右に紹介したごとく、高知県立図書館「山内文庫」に収蔵されている史料「高島流砲術」の中身は、「天保十二丑五月九日武州徳丸原高島流砲術場備打変化左ノ通」という標題の下に、当日の高島一門の西洋砲術の操練内容と、それに参加した門人名などが克明に記されている貴重な記録である。

ところで、筆者は、高知市民図書館蔵「徳弘家資料」の研究を進めるために、土佐藩関係の必要史料の蒐集に努めてきた。実は、その過程で、高知県立図書館の「山内文庫」と出会ったわけである。そこにおいて、第十三代藩主の山内豊熙自身が下曽根門人となって自ら書写した高島流砲術秘伝書『阿蘭陀流砲術書』（全二巻）と共に、武州徳丸原操練に藩士の徳弘孝蔵他を派遣し、当日の操練内容を克明に記録させた史料『高島流砲術』に遭遇することができた。これまでの管見の限りでは、本史料が、高島一門による武州徳丸原操練の記録としては、最も詳細かつ正確な史料であるみてよい。特に、本史料には、個々の高島門人が帰属する大名や幕臣の主家名が添書されている点が最大の特徴である。この個々の門人の帰属先の添書によって、高島門人の分布を知ることができる。なお、本史料に記載された高島門人は、史料の最後に「〆九拾九人」と記されてはいるが、師範である高島父子を含めて合計九十七名であり、その内で重複する門人が一名（長崎御役所内・大木藤四郎）認められ、したがって記載された門人の実数は九十六人である。さらに、実際には、同じ長崎地役人である「近藤房蔵」と「近藤勇蔵」とは同一人物と推定され、これを重複とみれば高島門人の実数は、高島父子を含めて、本史料における高島門人の実数は九

十五人となる。これまでに紹介した四点の史料では、いずれも高島門人は九十九人となっており、この門人数に関して本史料との相違が認められる。

いずれの史料においても、徳丸原操練に参加した高島門人の総数は九十九人と記載されていながら、何故に、相違が生じたのか。筆者は、従来、歴史学界で用いられてきた幾種類かの徳丸原操練記録と、本稿で紹介した高知県立図書館蔵「山内文庫」の史料との比較校合を試み、それらの史料的な妥当性の検証を試みた。同一の歴史的事実を記録した史料であるにも関わらず、紹介した各史料は、記された門人数ばかりでなく、門人名やその表記等の点においても、史料相互には多数の相違点が認められる。はたして、どれほどの、どのような相違点がみられるのか。この点を一目瞭然とするため、次に、これまでに紹介した五点の既知史料に記された高島門人名簿につき、記載された全ての門人名を五十音順に総合して一覧表とした【図表2　高島門人関係の既知史料の総合一覧】と、記載された門人名の重複を訂正して一名に統合して一覧表とした【図表3　高島門人統合一覧】とを、次に掲げることにする。

なお、左記の一覧表における出典史料名は、大槻如電編『新撰洋学年表』を〈大槻「洋学年表」〉、遠藤早泉『高島秋帆』所収の史料「天保十二年五月九日於武州徳丸原西洋砲術業書」を〈遠藤「高島秋帆」A〉、同じく遠藤早泉『高島秋帆』所収の史料「高島秋帆翁試砲于江府図記」を〈遠藤「高島秋帆」B〉、『天保雑記』所収の史料「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」を〈「天保雑記」〉、そして高知県立図書館蔵「山内史料」所収「高島流砲術」を〈高知県図〉と略記した。

図表2　高島門人関係の既知史料の総合一覧

	氏名	操練役務	帰属身分	出身藩		出典①	出典②	出典③	出典④
1	高島四郎太夫	下知、第一隊長							高知県図
2	高島四郎太夫	下知方						「天保雑記」	
3	高島四郎太夫	第一隊長				大槻「洋学年表」			
4	高島四郎太夫	第一隊長					遠藤「高島秋帆」A・B		
5	高島浅五郎	第二隊長					遠藤「高島秋帆」A・B		
6	高島浅五郎	第二隊長				大槻「洋学年表」			
7	高島浅五郎	下知方						「天保雑記」	
8	高島浅五郎	下知、第二隊長							高知県図
9	桐山　弥助				江戸門人	大槻「洋学年表」			
10	相山　弥助	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
11	相山　弥助	野戦筒	内弟子						高知県図
12	秋元　宰助	小筒打方	水野越前守殿家来					「天保雑記」	
13	秋元　宰助	両隊銃手	水野越前守家来、内弟子	遠州　浜松藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			

14	秋元 宰助	両隊銃手		遠州 浜松藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
15	秋本 宰助	小筒打方	水野越前守殿家来	遠州 浜松藩	江戸門人				高知県図
16	秋山 粂蔵	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
17	秋山 粂蔵	野戦筒	江川太郎左衛門家来		江戸門人				高知県図
18	秋山 粂蔵	両隊銃手	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
19	秋山久米蔵	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
20	浅井理三郎	小筒打方	田口加賀守家来					「天保雑記」	
21	浅井理三郎	野戦筒	長崎地役人		長崎門人				高知県図
22	浅井理三郎	両隊銃手	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」			
23	浅井理三郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
24	阿倍源三郎	両隊銃手		越前			遠藤「高島秋帆」A・B		
25	阿倍源三郎	小筒打方	酒井九馬尉家来、門人市川熊男取立					「天保雑記」	
26	安倍源三部	両隊銃手	酒井九馬尉家来	越前	江戸門人	大槻「洋学年表」			
27	安信源三郎	小筒打方	酒井九馬尉家来	越前	江戸門人				高知県図
28	荒木 千洲				長崎門人	大槻「洋学年表」			
29	荒木 千州	小筒打方	田口加賀守家来					「天保雑記」	
30	荒木 千州	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
31	荒木 千洲	野戦筒	長崎地役人						高知県図
32	有坂 淳蔵	野戦筒	吉川尚五郎家来	防州 岩国藩	江戸門人				高知県図
33	有坂 淳蔵	野戦筒	吉川尚五郎家来	防州 岩国藩				「天保雑記」	
34	有坂 淳蔵	点火者		防州 岩国藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
35	有馬 淳蔵	点火者	吉川尚五郎家来	防州 岩国藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			
36	有坂 鷹助	小筒打方	吉川尚五郎家来					「天保雑記」	
37	有坂 鷹助	両隊銃手			江戸門人	大槻「洋学年表」			
38	有坂 隆助	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
39	井下彦四郎	小筒打方	吉川尚五郎家来	防州 岩国藩				「天保雑記」	
40	井下彦四郎	野戦筒	吉川尚五郎家来	防州 岩国藩					高知県図

41	井下彦四郎	両隊銃手		防州　岩国藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
42	石山善右衛門	野戦筒	長崎御役所附						高知県図
43	市川　熊男	小筒打方	松平左京亮家来市川一学倅、当時田口加賀守家来					「天保雑記」	
44	市川　熊男	小筒打方	松平左京亮家来市川一学倅、其後田口加賀守家来	江戸	江戸門人				高知県図
45	市川　熊男	第一隊副長	松平左京亮家来市川一学倅、後田口加賀守家来	江戸	江戸門人	大槻「洋学年表」			
46	市川　熊男	第一隊　副長		江戸			遠藤「高島秋帆」A・B		
47	市川　貞吉	小筒打方	市川一学厄介					「天保雑記」	
48	市川　貞吉	小筒打方	市川一学厄介		江戸門人				高知県図
49	市川　貞吉	両隊銃手	市川一学厄介		江戸門人	大槻「洋学年表」			
50	市川　貞吉	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
51	市川　登	小筒打方	田口加賀守家来					「天保雑記」	
52	市川　登	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
53	市川　登	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
54	市川　登	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
55	出谷　春馬	小筒打方	御小姓組下曽根金三郎家来					「天保雑記」	
56	出谷　春長	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
57	出谷　春馬	野戦筒	御進物番下曽根金三郎家来		江戸門人				高知県図
58	出谷　春馬	両隊銃手	御進物番下曽根金三郎家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
59	伊東　清	小筒打方	板倉周防守家来、門人市川熊男取立	備中　松山藩				「天保雑記」	
60	伊東　清	野戦筒	板倉司之助家来	備中　松山藩	江戸門人				高知県図
61	伊東　清	両隊銃手	板倉司之助家来	備中　松山藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			
62	伊東　清	両隊銃手		備中　松山藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
63	井上　孝蔵	小筒打方	田口加賀守家来					「天保雑記」	
64	井上　孝蔵	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
65	井上　孝蔵	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
66	井上　孝蔵	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
67	井上　東作	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		

68	井上　藤作	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
69	井上　藤作	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
70	井上　藤作	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
71	井上彦四郎				江戸門人	大槻「洋学年表」			
72	衣幡　与市	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
73	衣幡　与市	野戦筒	長崎御役所附		長崎門人				高知県図
74	衣幡　与市	両隊銃手	長崎御役所附		長崎門人	大槻「洋学年表」			
75	衣幡　与一	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
76	岩島　千吉	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
77	岩島　千吉	野戦筒	江川太郎左衛門家来		江戸門人				高知県図
78	岩島　千吉	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
79	岩島　千太	両隊銃手	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
80	上原　司馬	野戦筒	長崎地役人		長崎門人				高知県図
81	上原　百馬	小筒打方	田口加賀守家来					「天保雑記」	
82	上原　百馬	両隣銃手	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」			
83	上原　百馬	両隣銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
84	大木藤三郎	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
85	大木藤三郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
86	大木藤四郎	挿火線並ニ圧火明	御進物番下曽根金三郎家来、長崎御役所附		長崎門人	大槻「洋学年表」			
87	大木藤四郎	野戦筒	長崎御役所附		長崎門人				高知県図
88	大木藤四郎	野戦筒	長崎御役所附					「天保雑記」	
89	大木藤四郎	挿火線並圧火門者					遠藤「高島秋帆」A・B		
90	大田　梁平	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
91	大田　梁平	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
92	大田　梁平	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
93	吉前　梁平	小筒打方	長崎ヨリ召連之者					「天保雑記」	
94	大原　俊七	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	

95	大原　俊七	野戦筒	江川太郎左衛門家来		江戸門人				高知県図
96	大原　俊七	両隊銃手	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
97	大原　俊七	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
98	大原安兵衛	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
99	大原安兵衛	野戦筒	江川太郎左衛門家来		江戸門人				高知県図
100	大原安兵衛	両隊銃手	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
101	大原安兵衛	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
102	大山善左衛門	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
103	大山善左衛門	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
104	大山善左衛門	両隊銃手			長崎門人	大槻「洋学年表」			
105	岡田　万蔵				江戸門人	大槻「洋学年表」			
106	岡田　万蔵	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
107	岡田　万蔵	野戦筒	江川太郎左衛門家来						高知県図
108	岡田　万蔵	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
109	小川喜代次	小筒打方	長崎ヨリ召連之者						
110	小川喜代次	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
111	小川喜代次	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
112	小川喜代次	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
113	小川　昌吉	両隊銃手		江戸			遠藤「高島秋帆」A・B		
114	小川左衛門	野戦筒	内弟子		江戸門人				高知県図
115	小川正左衛門	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
116	小川正左衛門		内弟子		江戸門人	大槻「洋学年表」			
117	小野金三郎	点火者	右大将様奥医師桃仙院三男	江戸	江戸門人	大槻「洋学年表」			
118	小野金三郎	点火者		江戸			遠藤「高島秋帆」A・B		
119	小野金三郎	野戦筒	右大将様奥医師桃仙院三男					「天保雑記」	
120	小野　金平		右大将様奥医師桃仙院三男	江戸	江戸門人				高知県図
121	小野藤之助	野戦筒	長崎御役所附						高知県図

122	小野道之助	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
123	小野道之助	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
124	尾上藤之助	車後運薬者	御進物番下曽根金三郎家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
125	尾上藤之助	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
126	尾上藤之助	野戦筒	御進物番下曽根金三郎家来		長崎門人				高知県図
127	尾上藤之助	車後運薬者					遠藤「高島秋帆」A・B		
128	斧野熊次郎				江戸門人	大槻「洋学年表」			
129	柏木　荘蔵	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
130	栢木　荘蔵	両隊銃手		豆州　江川家	江戸門人	大槻「洋学年表」			
131	栢木　荘蔵	両隊銃手		豆州　江川家			遠藤「高島秋帆」A・B		
132	加藤淳太夫	野戦筒	長崎地役人					「天保雑記」	
133	加藤淳太夫	野戦筒	長崎地役人		長崎門人				高知県図
134	加藤淳太夫	使捌杖者	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」			
135	加藤淳太夫	使側杖者					遠藤「高島秋帆」A・B		
136	金沢　求馬	野戦筒	水戸殿内山之部兵庫家来		江戸門人				高知県図
137	金沢　求馬	両隊銃手	水戸殿内山之部兵庫家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
138	金沢　求馬	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
139	金沢　直馬	小筒打方	水戸殿内山之部兵庫家来					「天保雑記」	
140	金子竹四郎	小筒打方	水戸殿家来					「天保雑記」	
141	金子竹四郎	両隊銃手			江戸門人	大槻「洋学年表」			
142	金子竹四郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
143	兼松　繁蔵	野戦筒	堀田備中守殿家来					「天保雑記」	
144	兼松　繁蔵	挿火線並ニ圧火明	堀田備中守殿家来	総州　佐倉藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			
145	兼松　繁蔵	挿火線並圧火門者		総州　佐倉藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
146	兼松　盤蔵	野戦筒	堀田備中守殿家来	総州　佐倉藩	江戸門人				高知県図
147	河津鋋三郎	小筒打方	清水殿御附人河津三郎兵衛三男		江戸門人				高知県図
148	河津鋋三郎		清水殿御附人河津三郎兵衛三男		江戸門人	大槻「洋学年表」			

149	河津鋌三郎	小筒打方	清水殿御附河津三郎兵衛三男、門人市川熊男取立					「天保雑記」		
150	河津逢之助	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B		
151	河津孝之助	小筒打方	清水殿御附河津三郎兵衛御惣領、門人市川熊男取立					「天保雑記」		
152	河津孝之助	小筒打方	清水殿御附人河津三郎兵衛倅	江戸	江戸門人			高知県図
153	河津孝之助	両隊銃手		江戸		遠藤「高島秋帆」A・B		
154	河津孝之助	両隊銃手	清水殿御附人河津三郎兵衛倅	江戸	江戸門人	大槻「洋学年表」		
155	小島　金蔵	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B		
156	北川　庫介	点火者	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」		
157	北川　庫助	野戦筒	田口加賀守家来				「天保雑記」	
158	北川　庫助	点火者				遠藤「高島秋帆」A・B		
159	北川　庫介	野戦筒	田口加賀守家来		長崎門人			高知県図
160	城戸　治八	小筒打方	長崎ヨリ召連之者				「天保雑記」	
161	城戸　治八	野戦筒	長崎ヨリ召連之者		長崎門人			高知県図
162	城戸　治八	両隊銃手	長崎ヨリ召連之者		長崎門人	大槻「洋学年表」		
163	城戸　治八	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B		
164	木下　勇蔵	野戦筒	長崎地役人		長崎門人			高知県図
165	木下勇之助	小筒打方	田口加賀守家来				「天保雑記」	
166	木下勇之助	両隊銃手	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」		
167	木下勇之助	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B		
168	工藤　久平	投火薬者	御留守居松平内匠頭家来	江戸	江戸門人	大槻「洋学年表」		
169	工藤　久平	投火薬者	御留守居内匠頭家来	江戸	江戸門人			高知県図
170	工藤　久平	野戦筒	御留守居松平内匠頭家来				「天保雑記」	
171	工藤　久平	投火薬者		江戸		遠藤「高島秋帆」A・B		
172	久保忠四郎	小筒打方	水戸殿家来				「天保雑記」	
173	久保忠四郎	小筒打方	水戸殿内		江戸門人			高知県図
174	久保忠四郎	両隊銃手	水戸殿内		江戸門人	大槻「洋学年表」		
175	久保忠四郎	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B		

176	久米井安蔵	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
177	久米井安蔵	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
178	久米井安蔵	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
179	久迷井安蔵	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
180	黒部六左エ門				江戸門人	大槻「洋学年表」			
181	高坂　應蔵	野戦筒	吉川尚五郎家来						高知県図
182	小坂道之助				長崎門人	大槻「洋学年表」			
183	小島　金蔵	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
184	小島　金蔵	野戦筒	長崎御役所附		長崎門人				高知県図
185	小島　金蔵	両隊銃手	長崎御役所附		長崎門人	大槻「洋学年表」			
186	小林　文蔵	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
187	小林　文蔵	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
188	小林　文蔵	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
189	小林　文蔵	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
190	近藤　勇蔵	野戦筒	長崎地役人						高知県図
191	近藤　権蔵				長崎門人	大槻「洋学年表」			
192	近藤　権蔵	小筒打方	田口加賀守家来					「天保雑記」	
193	近藤喜八郎	小筒打方	水戸殿家来					「天保雑記」	
194	近藤彦八郎	小筒打方	水戸殿内		江戸門人				高知県図
195	近藤彦八郎	両隊銃手	水戸殿内		江戸門人	大槻「洋学年表」			
196	近藤彦八郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
197	近藤　房蔵	馬上砲	長崎地役人						高知県図
198	近藤　雄蔵	騎馬	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」			
199	近藤　雄蔵	騎馬	長崎地役人				遠藤「高島秋帆」A・B		
200	斉藤三九郎	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
201	斉藤三九郎	野戦筒	江川太郎左衛門家来		江戸門人				高知県図
202	斉藤三九郎	両隊銃手	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			

203	斉藤三九郎	両隊銃手																												
204	斉藤助之進	小筒打方	田口加賀守家来																											
205	斉藤助之進	小筒打方	田口加賀守家来																											
206	斉藤助之進	両隊銃手	田口加賀守家来																											
207	斉藤助之進	両隊銃手																												
208	斉藤　兎毛	小筒打方	田口加賀守家来																											
209	斉藤　兎毛	小筒打方	田口加賀守家来																											
210	斉藤　兎毛	両隊銃手																												
211	斉藤兎毛橘	両隊銃手	田口加賀守家来																											
212	斉藤弥九郎	野戦筒	御代官江川太郎左衛門家来																											
213	斉藤弥九郎	野戦筒	御代官江川太郎左衛門家来																											
214	斉藤弥九郎	投火薬者	御代官江川太郎左衛門家来																											
215	斉藤弥九郎	投火薬者																												
216	相良弥之助	両隊銃手																												
217	品川梅次郎	野戦筒	長崎地役人天文台詰																											
218	品川梅二郎	両隊銃手																												
219	品川梅次郎	両隊銃手	長崎地役人天文台詰																											
220	品川福四郎	小筒打方	田口加賀守家来																											
221	島田総兵衛	車後運薬者																												
222	須田三保助	小筒打方	大村丹後守家来																											
223	須田三弥助	小筒打方	門人市川熊男之主大村丹後守家来	肥前　佐賀藩	江戸門人																									
224	須田三弥助	両隊銃手	大村丹後守家来	肥前　佐賀藩	江戸門人	大槻「洋学年表」																								
225	須田三弥助	両隊銃手		肥前　佐賀藩			遠藤「高島秋帆」A・B																							
226	関根　伝次	小筒打方	水戸殿家来					「天保雑記」																						
227	関根　伝次	小筒打方	水戸殿内		江戸門人				高知県図																					
228	関根　伝次	両隊銃手	水戸殿内		江戸門人	大槻「洋学年表」																								
229	関根　伝次	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B																							

230	芹沢繁次郎	小筒打方	西丸御書院番頭浅野遠江守組与力																												
231	芹沢繁次郎	小筒打方	西丸御書院番頭浅野遠江守組与力																												
232	芹沢繁二郎	両隊銃手																													
233	高木茂左衛門	小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力、門人市川熊男取立																												
234	高木茂左衛門	小筒打方	大門番頭戸田淡路守組与力	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図																							
235	高木茂左衛門	両隊銃手	大御番頭戸田淡路守組与力	江戸門人	大槻「洋学年表」																										
236	高木茂左衛門	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B																									
237	高須　昇蔵	野戦筒	長崎御役所附	長崎門人				高知県図																							
238	高須　昇蔵	両隊銃手	長崎御役所附	長崎門人	大槻「洋学年表」																										
239	高須　昇蔵	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B																									
240	高瀬　昇蔵	小筒打方	内弟子				「天保雑記」																								
241	高山岩之助	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B																									
242	冨山岩之助	小筒打方	水戸殿家来				「天保雑記」																								
243	冨山岩之助	両隊銃手	水戸殿内	江戸門人	大槻「洋学年表」																										
244	瀧田岩之助	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B																									
245	滝田　錬蔵	小筒打方	板倉周防守家来、門人市川熊男取立				「天保雑記」																								
246	拓植栄之助	小筒打方	田口加賀守家来	長崎門人				高知県図																							
247	拓植栄之助	小筒打方	長崎ヨリ召連之者				「天保雑記」																								
248	拓植栄之助	両隊銃手	田口加賀守家来	長崎門人	大槻「洋学年表」																										
249	拓植栄之助	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B																									
250	拓植長四郎	野戦筒	長崎地役人				「天保雑記」																								
251	拓植長次郎	野戦筒	長崎御役所附	長崎門人				高知県図																							
252	拓植長次郎	使捌杖者	長崎地役人	長崎門人	大槻「洋学年表」																										
253	拓植長次郎	使側杖者				遠藤「高島秋帆」A・B																									
254	竹内卯吉郎	小筒打方	長崎御役所附、内弟子				「天保雑記」																								
255	竹内卯吉郎	両隊銃手	長崎御役所附	長崎門人	大槻「洋学年表」																										
256	竹内卯吉郎	両隊銃手				遠藤「高島秋帆」A・B																									

257	竹内卯太郎	野戦筒	長崎御役所附		長崎門人				高知県図
258	田瀬 速水	小筒打方	酒井九馬尉家来、門人市川熊男取立					「天保雑記」	
259	田瀬 速水	小筒打方	酒井九馬尉家来		江戸門人				高知県図
260	田瀬 速水	両隊銃手	酒井九馬尉家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
261	田瀬 速水	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
262	滝田岩之助	両隊銃手	松平左京亮家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
263	瀧田岩之助	小筒打方	松平左京亮家来		江戸門人				高知県図
264	田々部六右衛門	野戦筒	水戸殿内						高知県図
265	田土部六右衛門	野戦筒	水戸殿家来					「天保雑記」	
266	田土部六衛門	投火薬者		水府 水戸藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
267	谷 熊次郎	小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力					「天保雑記」	
268	谷 熊次郎	小筒打方	大門番頭戸田淡路守組与力		江戸門人				高知県図
269	谷 熊次郎	両隊銃手	大御番頭戸田淡路守組与力		江戸門人	大槻「洋学年表」			
270	谷 熊次郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
271	冨山岩之助	小筒打方	水戸殿内		江戸門人				高知県図
272	塚本小八郎	小筒打方	松平安芸守家来	芸州 広島藩	江戸門人				高知県図
273	塚本小八郎	両隊銃手	松平安芸守家来	芸州 広島藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			
274	塚本小八郎	両隊銃手		芸州 広島藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
275	塚本 八郎	小筒打方	松平安芸守家来					「天保雑記」	
276	永洲藤五郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
277	永渕藤五郎	小筒打方	松平肥前守家来					「天保雑記」	
278	永渕藤五郎	小筒打方	松平肥前守家来						高知県図
279	長淵藤三郎				江戸門人	大槻「洋学年表」			
280	楢原 嘉平	小筒打方	長崎ヨリ召連之者					「天保雑記」	
281	楢林 嘉平	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
282	楢林 嘉平		田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
283	楢林 嘉平	車後運薬者					遠藤「高島秋帆」A・B		

284	楢林　長十	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
285	楢林　長重	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
286	楢林　長重	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
287	楢井　長重	小筒打方	長崎ヨリ召連之者					「天保雑記」	
288	西田　堅吾	小筒打方	長崎ヨリ召連之者					「天保雑記」	
289	西田　堅吾	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
290	西田　堅吾	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
291	西田　堅吾	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
292	丹羽作兵衛	小筒打方	松平肥前守家来					「天保雑記」	
293	丹羽作兵衛	小筒打方	松平肥前守家来	肥前　佐賀藩	江戸門人				高知県図
294	丹羽作兵衛	両隊銃手	松平肥前守家来	肥前　佐賀藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			
295	丹羽作兵衛	両隊銃手		肥前　佐賀藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
296	野口　勘太	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
297	野口　勘太	野戦筒	御進物番下曽根金三郎家来		長崎門人				高知県図
298	野口　勘太	両隊銃手	御進物番下曽根金三郎家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
299	野口　勘太	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
300	野口善太夫	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
301	野口善太夫	第二隊副長	長崎御役所附		長崎門人	大槻「洋学年表」			
302	野口善太夫	野戦筒	長崎御役所附		長崎門人				高知県図
303	野口善太夫	第二隊副長					遠藤「高島秋帆」A・B		
304	野村鎌之助	小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力、門人市川熊男取立					「天保雑記」	
305	野村鎌之助	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
306	野村鎌之助	両隊銃手	大御番頭戸田淡路守組与力		江戸門人	大槻「洋学年表」			
307	野村鎌之助	小筒打方	大門番頭戸田淡路守組与力		江戸門人				高知県図
308	野林鉄二郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
309	野村鉄次郎	小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力、門人市川熊男取立					「天保雑記」	
310	野村鉄次郎	小筒打方	大門番頭戸田淡路守組与力		江戸門人				高知県図

311	野村鉄次郎		大御番頭戸田淡路守組与力		江戸門人	大槻「洋学年表」			
312	馬場斧三郎	小筒打方	牧野角五郎家来、門人市川熊男取立					「天保雑記」	
313	馬場斧三郎	野戦筒	牧野角五郎家来		江戸門人				高知県図
314	馬場斧三郎	両隊銃手	牧野角五郎家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
315	馬場斧三郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
316	春　禎助	使掤杖者					遠藤「高島秋帆」A・B		
317	春　禎助	野戦筒	長崎地役人		長崎門人				高知県図
318	春　禎助	野戦砲	長崎地役人					「天保雑記」	
319	春　禎助	使掤杖者	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」			
320	伴　鉄吉	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
321	伴　鉄吉	野戦筒	内弟子		江戸門人				高知県図
322	伴　鉄吉	両隊銃手	内弟子		江戸門人	大槻「洋学年表」			
323	伴　鉄太郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
324	坂東孫兵衛	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
325	坂東孫兵衛	野戦筒	長崎御役所附		長崎門人				高知県図
326	坂東孫兵衛	両隊銃手	長崎御役所附		長崎門人	大槻「洋学年表」			
327	坂東孫兵衛	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
328	平山淳左エ門	両隊銃手	内弟子		江戸門人	大槻「洋学年表」			
329	平山淳左衛門	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
330	平山淳左衛門	野戦筒	内弟子		江戸門人				高知県図
331	平山醇左衛門	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
332	福田　秋太	野戦筒	長崎地役人					「天保雑記」	
333	福田　秋太	野戦筒	長崎地役人		長崎門人				高知県図
334	福田　秋太	挿火線並ニ圧火明	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」			
335	福田　秋太	挿火線並圧火門者					遠藤「高島秋帆」A・B		
336	藤田右源吾	野戦筒	水戸殿内山之部兵庫家来		江戸門人				高知県図
337	藤田右源太	小筒打方	水戸殿内山之部兵庫家来					「天保雑記」	

338	藤田右源太	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
339	藤田右源太	両隊銃手	水戸殿内山之部兵庫家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
340	堀　覚三	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
341	堀　覚蔵	小筒打方	御留守居松平内匠頭家来					「天保雑記」	
342	堀　覚蔵	小筒打方	松平内匠頭家来		江戸門人				高知県図
343	堀　覚蔵	両隊銃手	御留守居松平内匠頭家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
344	牧野楠之助	両隊銃手	松平左京亮家来		江戸門人	大槻「洋学年表」			
345	牧野恂之助	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
346	牧野初之助	小筒打方	松平左京亮家来、門人市川熊男取立					「天保雑記」	
347	牧野初之助	小筒打方	松平左京亮家来		江戸門人				高知県図
348	牧野　平馬	小筒打方	松平左京亮家来	上野　高崎藩	江戸門人				高知県図
349	牧野　平馬	両隊銃手	松平左京亮家来	上野　高崎藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			
350	牧野　平馬	両隊銃手		上野　高崎藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
351	牧野　平馬	小筒打方	松平左京亮家来、門人市川熊男取立					「天保雑記」	
352	三橋　源平	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
353	三橋　源平	両隊銃手			長崎門人	大槻「洋学年表」			
354	三橋　源平	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
355	三原愛一郎	両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
356	三原愛次郎	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来					「天保雑記」	
357	三原愛次郎	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人				高知県図
358	三原愛次郎	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」			
359	村上　定平	小筒打方	三宅土佐守家来					「天保雑記」	
360	村上　定平	小筒打方	三宅土佐守家来	参州　三河藩	江戸門人				高知県図
361	村上　定平	両隊銃手	三宅土佐守家来	参州　三河藩	江戸門人	大槻「洋学年表」			
362	村上　定平	両隊銃手		参州　三河藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
363	元川六兵衛	小筒打方	内弟子					「天保雑記」	
364	元川六兵衛	野戦筒	内弟子		江戸門人				高知県図

365	元川六兵衛		内弟子																							
366	山田　熊蔵	小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来																							
367	山田　熊蔵	野戦筒	江川太郎左衛門家来		江戸門人																					
368	山田　熊蔵	両隊銃手	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」																				
369	山田　熊蔵	両隊銃手																								
370	山本鈔三郎	小筒打方	小普請組与力																							
371	山本鈔三郎	小筒打方	小普請支配戸塚備前守組御留守居与力																							
372	山本鈔三郎	両隊銃手																								
373	山本鉄三郎				江戸門人	大槻「洋学年表」																				
374	山本　小平	小筒打方	内弟子																							
375	山本　小平	野戦筒	内弟子		江戸門人																					
376	山本　小平		内弟子		江戸門人	大槻「洋学年表」																				
377	山本小弥太	両隊銃手																								
378	山本清太郎	小筒打方	長崎ヨリ召連之者																							
379	山本清太郎	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人																					
380	山本清太郎	遊副長	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」																				
381	山本清太郎	遊副長																								
382	横川喜野右衛門	両隊銃手																								
383	横川喜之三衛門	小筒打方	長崎ヨリ召連之者																							
384	横川喜三左エ門	両隊銃手	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」																				
385	横川喜三左衛門	小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人																					
386	吉川　七郎	小筒打方	松平大隅守家来																							
387	吉井　七郎	小筒打方	松平大隅守家来	遠州　浜松藩	江戸門人																					
388	吉井　七郎	両隊銃手	松平大隅守家来	遠州　浜松藩	江戸門人	大槻「洋学年表」																				
389	吉井　七郎	両隊銃手		薩州　薩摩藩			遠藤「高島秋帆」A・B																			
390	吉野　英臣	両隊銃手	水戸殿内、水府		江戸門人	大槻「洋学年表」																				
391	吉野　英臣	小筒打方	水戸殿家来																							

図表3　高島門人統合一覧

	氏名	別記	操練役務	帰属身分	出身藩	入門場所	出典①	出典②	出典③	出典④
1	高島四郎太夫		下知、第一隊長				大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
2	高島浅五郎		下知、第二隊長				大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
3	相山　弥助	桐山　弥助	野戦筒、小筒打方	内弟子		江戸門人	大槻「洋学年表」		「天保雑記」	高知県図
4	秋元　宰助	秋本　宰助	両隊銃手、小筒打方	水野越前守家来、内弟子	遠州　浜松藩	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
5	秋山　粂蔵	秋山久米蔵	両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
6	浅井理三郎		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎地役人、田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」		「天保雑記」	高知県図
7	阿倍源三郎	安倍源三部、安信源三郎	両隊銃手、小筒打方	酒井九馬尉家来、門人市川熊男取立	越前	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
8	荒木　千洲	荒木　千州	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎地役人、田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
9	有坂　淳蔵	有馬　淳蔵	野戦筒、点火者	吉川尚五郎家来	防州　岩国藩	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
10	有坂　鷹助	有坂　隆助	両隊銃手、小筒打方	吉川尚五郎家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	
11	井下彦四郎		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	吉川尚五郎家来	防州　岩国藩			遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
12	石山善右衛門		野戦筒	長崎御役所附						高知県図
13	市川　熊男		第一隊副長、小筒打方	松平左京亮家来市川一学倅、後田加賀守家来	江戸	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
14	市川　貞吉		両隊銃手、小筒打方	市川一学厄介		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
15	市川　登		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
16	出谷　春馬	出谷　春長	両隊銃手、小筒打方	御進物番下曽根金三郎家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
17	伊東　清	伊藤　清	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	板倉周防守家来、門人市川熊男取立	備中　松山藩	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
18	井上　孝蔵		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
19	井上　藤作	蔵作、東作	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
20	井上彦四郎					江戸門人	大槻「洋学年表」			
21	衣橋　与市	衣幡　与一	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
22	岩島　千吉	岩島　千太	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
23	上原　司馬	上原　百馬	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
24	大木藤三郎		両隊銃手、小筒打方	内弟子				遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	
392	吉野　英臣	両隊銃手			水府　水戸藩			遠藤「高島秋帆」A・B		
393	吉川　英臣	小筒打方	水戸殿内			江戸門人				高知県図

25	大木藤四郎		野戦筒、挿火線並二圧火明	御進物番下曽根金三郎家来、長崎御役所内		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
26	大田　梁平	吉前　梁平	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
27	大原　俊七		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
28	大原安兵衛		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
29	大山善左衛門	石山善右衛門	両隊銃手、小筒打方	内弟子		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	
30	岡田　万蔵		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
31	小川喜代次	小川喜代治	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B		高知県図
32	小川　昌吉		両隊銃手		江戸					
33	小川正左衛門	小川正右エ門、小川左衛門	両隊銃手、小筒打方	内弟子		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
34	小野金三郎	金平、金五郎	野戦筒、点火者	右大将様奥医師桃仙院三男	江戸	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
35	小野道之助	小野藤之助	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附、内弟子				遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
36	尾上藤之助		両隊銃手、小筒打方、車後運薬者	御進物番下曽根金三郎家来、内弟子		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
37	斧野熊次郎					江戸門人	大槻「洋学年表」			
38	柏木　荘蔵	柏木　総蔵	両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	豆州　江川家	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	
39	加藤淳太夫		使擲杖者	長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
40	金沢　求馬	金沢救馬、金沢直馬	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	水戸殿内山之部兵庫家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
41	金子竹四郎		両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	
42	兼松　繁蔵	兼松　盤蔵	野戦筒、挿火線並二圧火明〃	堀田備中守殿家来	総州　佐倉藩	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
43	河津鋌三郎		小筒打方	滑水殿御附河津三郎兵衛三男、門人市川熊男取立		江戸門人	大槻「洋学年表」		「天保雑記」	高知県図
44	河津孝之助		両隊銃手、小筒打方	滑水殿御附河津三郎兵衛御惣領、門人市川熊男取立		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
45	河津逢之助		両隊銃手					遠藤「高島秋帆」A・B		
46	北川　庫助	北川　庫介	野戦筒、点火者	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
47	城戸　治八		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎ヨリ召連之者		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
48	木下　勇蔵	木下勇之助	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎地役人		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
49	工藤　久平		野戦筒、投火薬者	御留守居松平内匠頭家来	江戸	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
50	久保忠四郎		両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来		江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
51	久米井安蔵	久迷井安蔵	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
52	黒部六左エ門					江戸門人	大槻「洋学年表」			

| | | |

| | | |

110	山本清太郎		遊副長、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
111	横川喜三左衛門	喜野右衛門、喜三右衛門	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者		長崎門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
112	吉井　七郎	吉川　七郎	両隊銃手、小筒打方	松平大隅守家来	薩州　薩摩藩	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図
113	吉川　英臣	吉野　英臣	両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来	水府　水戸藩	江戸門人	大槻「洋学年表」	遠藤「高島秋帆」A・B	「天保雑記」	高知県図

(五) 武州徳丸原操練に参加した高島門人の特定

以上、高島秋帆が、天保十二年五月九日、幕命を拝して武州徳丸原で実施した西洋砲術操練の記録史料を紹介してきた。本稿で取り上げた五点の史料は、それら全体の門人一覧をもって示したごとく、記載門人の内容が相違し、同一門人でも氏名表記が異なるなど、同じ歴史的事実を記録した史料であるにも関わらず、多くの相違点を確認することができる。それ故に上記五点の史料に記載された内容を、高知県立図書館蔵「高島流砲術」を中心として比較分析し、重複する門人名を統合して可能な限り高島門人を絞り込むと、前掲のような【図表3　高島門人統合一覧】となる。その際に、例えば名簿の三番に記載の「相山弥助」の場合は、高知県立図書館史料と「天保史料」では「相山弥助」と記載されている。だが、大槻「新撰洋学史年表」では「桐山弥助」と記されている。この相違点を、他の記載事項を含めて総合的に勘案して、「相山弥助」と「桐山弥助は」は同一人物と推定し、「相山弥助」をもって統一的に記載した。以下も、同様な方法的手順を経て、同一門人と判断、あるいは推定される場合は、門人名を統一してまとめたのが、次の【図表4　高島門人の所属身分別の統合一覧】である。

図表4　高島門人の所属身分別の統合一覧

	氏名	別記	操練役務	帰属身分	身分	身分詳細	入門場所		
1	高島四郎太夫		下知、第一隊長		幕臣	幕臣（諸組与力格、長崎会所調役頭取）		「天保雑記」	高知県図
2	高島浅五郎		下知、第二隊長		幕臣	幕臣（諸組与力格）嫡男		「天保雑記」	高知県図
3	谷　熊次郎		両隊銃手、小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力	幕臣	幕臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
4	野村鎌之助		両隊銃手、小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力、門人市川熊男取立	幕臣	幕臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
5	高木茂左衛門		両隊銃手、小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力、門人市川熊男取立	幕臣	幕臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
6	野村鉄次郎		両隊銃手、小筒打方	大御番頭戸田淡路守組与力、門人市川熊男取立	幕臣	幕臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
7	伴　鉄太郎	伴　鉄吉	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	内弟子	幕臣	幕臣（旗本）	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
8	小野金三郎	金平、金五郎	野戦筒、点火者	右大将様奥医師桃仙院三男	幕臣	幕臣（奥医師）三男	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
9	河津孝之助		両隊銃手、小筒打方	清水殿御附河津三郎兵衛御惣領、門人市川熊男取立	幕臣	幕臣嫡男	江戸門人	「天保雑記」	高知県図

10	河津鋌三郎		小筒打方	清水殿御附河津三郎兵衛三男、門人市川熊男取立	幕臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
11	尾上藤之助		両隊銃手、小筒打方、車後運薬者	御進物番下曽根金三郎家来、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
12	野口　勘太		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御進物番下曽根金三郎家来、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
13	岡田　万蔵		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
14	岩島　千吉	岩島　千太	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
15	大原安兵衛		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
16	柏木　荘蔵	柏木　総蔵	両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	
17	斉藤三九郎		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
18	斉藤弥九郎		野戦筒、投火薬者	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
19	山田　熊蔵		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
20	秋山　粂蔵	秋山久米蔵	両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
21	大原　俊七		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	御代官江川太郎左衛門家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
22	工藤　久平		野戦筒、投火薬者	御留守居松平内匠頭家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
23	堀　覚蔵	堀　覚三	両隊銃手、小筒打方	御留守居松平内匠頭家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
24	荒木　千洲	荒木　千州	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎地役人、田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
25	浅井理三郎		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎地役人、田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
26	井上　孝蔵		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
27	井上　藤作	藏作、東作	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
28	久米井安蔵	久迷井安蔵	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
29	近藤　権蔵		小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣		「天保雑記」	
30	斉藤　兎毛	斎藤免毛橘	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
31	市川　登		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
32	北川　庫助	北川　庫助	野戦筒、点火者	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図

33	斉藤助之進		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
34	楢林　長重	楢林　長十、楢井　長重	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
35	横川喜三左衛門	喜野右衛門、喜三右衛門	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
36	山本清太郎		遊副長、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
37	小川喜代次	小川喜代治	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人		高知県図
38	西田　堅吾		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
39	大田　梁平	吉前　梁平	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
40	拓植栄之助		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
41	楢林　嘉平	楢原　嘉平	車後運薬者、小筒打方	田口加賀守家来、長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
42	木下勇之助	木下　勇蔵	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎地役人	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
43	小林　文蔵		両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
44	三原愛次郎	愛二郎、愛一郎	両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
45	品川梅次郎	品川梅二郎	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	田口加賀守家来、長崎地役人、天文台詰	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 長崎奉行家臣	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
46	拓植長次郎		野戦筒	長崎御役所附	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 （長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
47	竹内卯吉郎	竹内卯太郎	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 （長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
48	衣橋　与市	衣幡　与一	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 （長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
49	石山善右衛門		野戦筒	長崎御役所附	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣 （長崎地役人）			高知県図

50	高須　昇蔵	高橋　昇蔵	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
51	坂東孫兵衛		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
52	小島　金蔵		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
53	野口善太夫		第二隊副、長野戦筒、小筒打方	長崎御役所附、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
54	小野道之助	小野藤之助	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎御役所附、内弟子	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）		「天保雑記」	高知県図
55	加藤淳太夫		使搦杖者	長崎地役人	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
56	春　禎助	春　貞助	野戦筒、使搦杖者	長崎地役人	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
57	福田　秋太		野戦筒、挿火線並圧火門者	長崎地役人	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
58	近藤　房蔵		馬上砲	長崎地役人	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）			高知県図
59	近藤　勇蔵	近藤　雄蔵	騎馬、野戦筒	長崎地役人	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人		高知県図
60	上原　司馬	上原　百馬	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎地役人	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣（長崎地役人）	長崎門人	「天保雑記」	高知県図
61	永渕藤五郎	長淵藤三郎	両隊銃手、小筒打方	松平肥前守家来	藩士	肥前　佐賀藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
62	丹羽作兵衛		両隊銃手、小筒打方	松平肥前守家来	藩士	肥前　佐賀藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
63	須田三弥助	須田三保助	両隊銃手、小筒打方	門人市川熊男之主大村丹後守家来	藩士	肥前　大村藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
64	井下彦四郎		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	吉川尚五郎家来	藩士	防州　岩国藩家臣		「天保雑記」	高知県図
65	有坂　鷹蔵	高坂　鷹蔵	野戦筒	吉川尚五郎家来	藩士	防州　岩国藩家臣			高知県図
66	有坂　鷹助	有坂　隆助	両隊銃手、小筒打方	吉川尚五郎家来	藩士	防州　岩国藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	
67	有坂　淳蔵	有馬　淳蔵	野戦筒、点火者	吉川尚五郎家来	藩士	防州　岩国藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
68	村上　定平		両隊銃手、小筒打方	三宅土佐守家来	藩士	参州　田原藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
69	市川　貞吉		両隊銃手、小筒打方	市川一学厄介	藩士	上野　高崎藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図
70	阿倍源三郎	安倍源三郎、安信源三郎	両隊銃手、小筒打方	酒井九馬尉家来、門人市川熊男取立	藩士	出羽　庄内藩家臣	江戸門人	「天保雑記」	高知県図

71	田瀬　速水		両隊銃手、小筒打方	酒井九馬尉家来、門人市川熊男取立	藩士	出羽　庄内藩家臣	江戸門人
72	塚本小八郎	塚本　八郎	両隊銃手、小筒打方	松平安芸守家来	藩士	芸州　広島藩家臣	江戸門人
73	滝田岩之助	滝田岩之助	両隊銃手、小筒打方	松平左京亮家来	藩士	上野　高崎藩家臣	江戸門人
74	牧野初之助	楠之助、恂之助	両隊銃手、小筒打方	松平左京亮家来、門人市川熊男取立	藩士	上野　高崎藩家臣	江戸門人
75	牧野　平馬		両隊銃手、小筒打方	松平左京亮家来、門人市川熊男取立	藩士	上野　高崎藩家臣	江戸門人
76	市川　熊男		第一隊副長、小筒打方	松平左京亮家来市川一学倅、後田加賀守家来	藩士	上野　高崎藩家臣	江戸門人
77	吉井　七郎	吉川　七郎	両隊銃手、小筒打方	松平大隅守家来	藩士	薩州　薩摩藩家臣	江戸門人
78	吉川　英臣	吉野　英臣	両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
79	田土部六右衛門	田々部六衛門、田々部六右衛門	野戦筒、投火薬者	水戸殿家来	藩士	水府　水戸藩家臣	
80	関根　伝次		両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
81	久保忠四郎		両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
82	冨山岩之助	高山岩之助	両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
83	金子竹四郎		両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
84	近藤彦八郎	近藤喜八郎	両隊銃手、小筒打方	水戸殿家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
85	金沢　求馬	金沢救馬、金沢直馬	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	水戸殿内山之部兵庫家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
86	藤田右源太	藤田右源吉	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	水戸殿内山之部兵庫家来	藩士	水府　水戸藩家臣	江戸門人
87	秋元　宰助	秋本　宰助	両隊銃手、小筒打方	水野越前守家来、内弟子	藩士	遠州　浜松藩家臣	江戸門人
88	平山淳左衛門	平山淳左エ門、淳右衛門	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	内弟子	藩士	肥前　佐賀藩家臣	江戸門人
89	滝田　錬蔵		小筒打方	板倉周防守家来、門人市川熊男取立	藩士	備中　松山藩家臣	
90	伊東　清	伊藤　清	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	板倉周防守家来、門人市川熊男取立	藩士	備中　松山藩家臣	江戸門人
91	馬場斧三郎		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	板倉周防守家来、門人市川熊男取立	藩士	備中　松山藩家臣	江戸門人
92	兼松　繁蔵	兼松　盤蔵	野戦筒、挿火線並二圧火明	堀田備中守殿家来	藩士	総州　佐倉藩家臣	江戸門人
93	城戸　治八		野戦筒、両隊銃手、小筒打方	長崎ヨリ召連之者	幕臣家臣		長崎門人
94	出谷　春馬	出谷　春長	両隊銃手、小筒打方	御進物番下曽根金三郎家来	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	江戸門人
95	大木藤四郎		野戦筒、挿火線並二圧火明	御進物番下曽根金三郎家来、長崎御役所内	幕臣家臣	幕臣（旗本）家臣	長崎門人
96	大山善左衛門	石山善右衛門	両隊銃手、小筒打方	内弟子			長崎門人
97	大木藤三郎		両隊銃手、小筒打方	内弟子			
98	三橋　源平		両隊銃手、小筒打方	内弟子			長崎門人

71	「天保雑記」	高知県図	
72	「天保雑記」	高知県図	
73		高知県図	
74	「天保雑記」	高知県図	
75	「天保雑記」	高知県図	
76	「天保雑記」	高知県図	
77	「天保雑記」	高知県図	
78	「天保雑記」	高知県図	
79	「天保雑記」	高知県図	
80	「天保雑記」	高知県図	
81	「天保雑記」	高知県図	
82	「天保雑記」	高知県図	
83	「天保雑記」		
84	「天保雑記」	高知県図	
85	「天保雑記」	高知県図	
86	「天保雑記」	高知県図	
87	「天保雑記」	高知県図	
88	「天保雑記」	高知県図	
89	「天保雑記」		
90	「天保雑記」	高知県図	
91	「天保雑記」	高知県図	
92	「天保雑記」	高知県図	
93	「天保雑記」	高知県図	
94	「天保雑記」	高知県図	
95	「天保雑記」	高知県図	
96	「天保雑記」		
97	「天保雑記」		
98	「天保雑記」		

99	元川六兵衛		野戦筒、小筒打方	内弟子			江戸門人	「天保雑記」	高知県図
100	山本　小平	山本小弥太	野戦筒、両隊銃手、小筒打方	内弟子			江戸門人	「天保雑記」	高知県図
101	小川正左衛門	小川正右エ門、小川左衛門	両隊銃手、小筒打方	内弟子			江戸門人	「天保雑記」	高知県図
102	三原愛一郎	三原愛二郎（B）	両隊銃手		内弟子				
103	相山　弥助	桐山　弥助	野戦筒、小筒打方	内弟子			江戸門人	「天保雑記」	高知県図
104	井上彦四郎						江戸門人		
105	斧野熊次郎						江戸門人		
106	黒部六左エ門						江戸門人		
107	小坂道之助						長崎門人		
108	河津逢之助		両隊銃手						
109	小川　昌吉		両隊銃手						
110	相良弥之助		両隊銃手						
111	島田総兵衛		車後運薬者						

なお、前述の佐藤昌介『洋学史の研究』においては、徳丸原での操練に参加した高島門人の身分や帰属する藩などが、次のように述べられている。

徳丸ヶ原の演練に参加した高島の門人は、（中略）全員の氏名と身分は、現在のところ、正確にはわかっていない。判明しているものだけについてみると、幕臣・諸藩士（陪臣を含む）、長崎地役人、高島の内弟子、随行者に分けられる。幕臣・諸藩士について、おおよその数を示すと、つぎの通りである。まず幕臣は、前長崎奉行田口喜行の家来一五人、代官江川英竜の家臣一〇人、長崎奉行所附五人を除くと、九人で、かれらはおおむね与力級の下級幕臣である。なおこれに旗本の家臣を加えれば、一一人となる。かれらは江戸で高島の門人となったものと推定される。つぎに諸藩士は十三の藩にわたり、総数は三〇人である。(32)

上記の佐藤のあげた高島門人に関する数字は、その実態を裏付ける個々の門人名が、具体的に明示されておらず、したがって確認することができず問題といわざるをえない。

まず、高島門人の帰属に関して、筆者の分析結果を示すと次のようになる。佐藤の分析では「前長崎奉行田口喜行家来一五人」とされている点について、筆者の場合には、長崎地役人四人を含めると、次の一二人を数えることができる。

尾上藤之助、荒木千洲（長崎地役人）、浅井理三郎（長崎地役人）、井上孝蔵、井上藤作、久米井安蔵、近藤権蔵、斉藤兎毛、市川登、北川庫助、斉藤助之進、楢林長重、横川喜三左衛門、山本清太郎、小川喜代次、西田堅吾、大田梁平、拓植栄之助、楢林嘉平、木下勇之助（長崎地役人）、小林文蔵、三原愛次郎、品川梅次郎（長崎地役人）

同様に、上記の佐藤の「長崎御役所附が一〇人」という記述については、筆

者の場合は一人少なく九人（竹内卯吉郎、拓植長次郎、衣橋与市、石山善右衛門、高須昇蔵、坂東孫兵衛、小島金蔵、野口善太夫、小野道之助）である。さらに、「代官江川英竜の家臣一〇人」に付いても、筆者の場合は、それより一人少ない九人（岡田万蔵、岩島千吉、大原安兵衛、柏木荘蔵、斉藤三九郎、斉藤弥九郎、山田熊蔵、秋山粂蔵、大原俊七）である。また、下曽根金三郎（信敦）の家来も、江川よりも少ない四人（出谷春馬、大木藤四郎、尾上藤之助、野口勘太）を数える。

以上のごとく、佐藤の研究成果と筆者のそれとの間には若干の相違が認められる。最も異なる点は、諸藩の家臣に関してである。上記のごとく佐藤は、帰属する出身藩名の明らかな高島門人を三〇人としているが、その根拠となる藩別の内訳を示す個々の門人名はあげられておらず、単に数字だけをあげて簡単な一覧表に表示しているだけである。したがって数字の内容、すなわち各藩に帰属する個々の藩士名がまったく不明である点は、問題といわざるをえない。それに対して筆者が明らかにすることができた藩別の高島門人は、次の三二人である。

永渕藤五郎（佐賀藩家臣）、丹羽作兵衛（佐賀藩家臣）、須田三弥助（大村藩家臣）、井下彦四郎（岩国藩家臣）、有坂鷹蔵（岩国藩家臣）、有坂鷹助（岩国藩家臣）、有坂淳蔵（岩国藩家臣）、村上定平（田原藩家臣）、市川貞吉（高崎藩家臣）、阿倍源三郎（庄内藩家臣）、田瀬速水（庄内藩家臣）、塚本小八郎（広島藩家臣）、瀧田岩之助（高崎藩家臣）、牧野初之助（高崎藩家臣）、牧野平馬（高崎藩家臣）、市川熊男（高崎藩家臣）、吉井七郎（薩摩藩家臣）、吉川英臣（水戸藩家臣）、田土部六右衛門（水戸藩家臣）、関根伝次（水戸藩家臣）、久保忠四郎（水戸藩家臣）、冨山岩之助（水戸藩家臣）、金子竹四郎（水戸藩家臣）、近藤彦八郎（水戸藩家臣）、金沢求馬（水戸藩家臣）、藤田右源太（水戸藩家臣）、秋元宰助（浜松藩家臣）、平山淳左衛門（佐賀藩家臣）、滝田錬蔵（松山藩家臣）、伊東清（松山藩家臣）、馬場斧三郎（松山藩家臣）、兼松繁蔵（佐倉藩家臣）

前述した佐藤の藩別高島門人一覧表[33]に、以上のような筆者が本稿で析出しえた門人三二人の藩別出身とを重ね合わせ、両者を比較一覧表にしたものが、次の表である。

	水戸藩	高崎藩	西尾藩	岩国藩	佐賀藩	庄内藩	備中松山藩
佐藤研究	8	4	3	3	3	2	1
坂本研究	9	5	0	4	3	2	3
大村藩	1	1	1	1	1	1	32
浜松藩	1	1	1	1	1	1	30
薩摩藩	1	1	1	1	1	1	合計

上記の比較一覧表によって、両者の分析結果の相違点が、いつくか認められる。最大の違いは、佐藤では西尾藩（三河）が三人と記されているところが、筆者の場合は当該藩に該当する門人はいないという点である。はたして、この相違は、「御留守居松平内匠頭家来」を、どのような人物と解釈するかによって生じている。佐藤は、この人物を、西尾藩六万石の藩主「松平乗全」と理解したが、筆者の場合は、同じ三河に領地をもつ旗本五千石で御留守居の「松平内匠頭乗譲」と解釈した[34]。この違いである。それにしても「御留守居松平内匠頭家来」に該当する高島門人は、筆者が確認しえたのは工藤久平と出谷春馬の二人であり、佐藤の示した三人目を確認することができない。

おわりに

以上のごとく、一八四二（天保十二）年五月に、武州徳丸原で高島秋帆が幕命を受けて披瀝した西洋砲術・西洋銃陣の操練に参加した高島門人に関しては、同一の歴史的事実を記録した史料でありながら、史料ごとに門人や門人名の記載内容が異なっている事実が確認された。本稿で取り扱った史料は、管見の限りでの五点である。だが、これらの他にも関係史料が存在する可能性はある。本稿では、すでに周知の既知史料四点の内容の吟味と、新たに高知県立図書館が所蔵する史料を紹介し、それら合計五点の史料の比較考察を行った。その結果、史料相互の間の相違点の解明や、かなりの部分の参加門人の確定をみることができた。しかし、残念ながら五点の史料を比較分析しても、なお、当日、操練に参加した高島門人の全体を完全に特定することはできなかった。五点の史料の全てに共通に記載されている門人は、高島父子を含めて、次の八十二人である。この数字は、参加人員の全体を九十九人とすれば約八十三％、土佐藩史料の九十五名が正しいとしても約八十六％に相当するものである。彼らが、当日の操練に参加した門人であることは間違いないものとみることができる。

高島四郎太夫、高島浅五郎、秋元宰助、秋山粂蔵、阿倍源三郎、荒木千洲、有坂淳蔵、市川熊男、市川貞吉、市川登、出谷春馬、伊東清、井上孝蔵、井上藤作、衣橋与市、岩島千吉、上原司馬、大木藤四郎、大田梁平、大原俊七、大原安兵衛、岡田万蔵、小川正左衛門、小野金三郎、尾上藤之助、加藤淳太夫、金沢求馬、兼松繁蔵、河津孝之助、北川庫助、城戸治八、木下勇蔵、工藤久平、久保忠四郎、久米井安蔵、小島金蔵、小林文蔵、近藤彦八郎、斉藤三九郎、斉藤助之進、斉藤兎毛、斉藤弥九郎、品川梅次郎、須田三弥助、関根伝次、高木茂左衛門、高須昇蔵、冨山岩之助、拓植栄之助、拓植長次郎、竹内卯吉郎、田瀬速水、谷熊次郎、塚本小八郎、永渕藤五郎、楢林嘉平、楢林長重、西田堅吾、丹羽作兵衛、野口勘太、野口善太夫、野村鎌之助、野村鉄次郎、馬場斧三郎、春禎助、伴鉄太郎、坂東孫兵衛、平山淳左衛門、福田秋太、藤田右源太、堀覚蔵、牧野初之助、牧野平馬、村上定平、山田熊蔵、山本鉢三郎、山本小平、山本清太郎、横川喜三左衛門、吉井七郎、吉川英臣

なお、本稿における関係史料の比較検討作業を通して、最も誤植や誤記が目立ち、研究資料として使用するにはあまりにも問題の多い史料は、皮肉にも最も一般に知られた史料で、利用度の高い大槻如電編『新編洋学年表』に記載された「徳丸原縦隊調練人名」であることが明らかとなった。それに反して、『天保雑記』所収の「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」と高知県立図書館蔵「山内文庫」に収められた史料「高島流砲術」とは、史料的な正確性と信頼性が高く、特に後者の史料的精度は最も高いものと評することができる。

はたして、本稿において徳丸原操練に参加した高島門人と確定された人物たちが、その後の幕末期の中央・地方において、軍事科学を媒介とした洋学の普及拡大化に関わり、如何に幕末維新期の日本近代化に貢献していったか。彼らの活動の軌跡に関しては、他日を期したい。

注記

(1) 高島秋帆の上書「洋砲採用の建議」の全文は、「陸軍歴史」の「巻一」（勁草書房版『勝海舟全集』第十五巻、六―九頁に所収）。なお、『天保雑記』第四〇冊には高島自身の原文に近い毛筆書き全文が収められている。同建議書の中で、高島は、英国をはじめとする西洋諸国は、「火砲並びに戦艦の便利を以て武備第一の事に相定め、砲術は最も護国第一の術と仕り、専ら盛んに相備え習熟仕り候」という状況にあったのに反して、中国の砲術は「児戯に比し候」の状態と、出島のオランダ人たちは嘲笑していたと述べ、それ故に「唐国大いに敗亡に及び、イギリス方には一人も死亡もこれ無き趣」は当然の結末と分析した。このアヘン戦争の顛末をもって他山の石となし、わが国は、「砲術の儀は護国第一の武備」と認識して、早急に洋砲を採用すべき旨を開陳したのが、高島秋帆であった。

(2) 幕命を受けた高島が、長崎を出立して江戸に到着するまでの時間的な経過に関しては、佐藤昌介『洋学史の研究』（中央公論社、一九八〇年）、二六八頁を参照。

(3) 高島が幕臣に新規召し抱となったことについては、『陸軍歴史』巻一（前掲『勝海舟全集』第十五巻、一三頁）と、後に紹介する『天保雑記』（第四〇冊、七四頁）に原史料が収録されている。両史料の表現には相違が認められるが、『天保雑記』の方が日付や文面に関して詳細である。そこには、江戸到着後で徳丸原操練前の三月二十二日付で、「格別出精相勤候ニ付　被召抱諸組与力格　被仰付其身一代限御扶持方七人扶持被下候　長崎会所取調役頭取相勤可申候」と記されている。

(4) 徳丸原での操練の日程に関しては、操練当日に検分役（按察使）を勤める幕府御目付水野舎人から達示書が出されたが、その日程を巡っても史料により相違が認められる。『陸軍歴史』巻一（前掲『勝海舟全集』第十五巻、一四頁）には「五月九日（雨天に候えば日を替え十日、十一日）」とあるが、『天保雑記』第四〇冊では「五月七日　雨天ニ候得バ替日　八日　九日」と記されている。だが、この点に関しては、昭和戦前に刊行された遠藤早泉『高島秋帆』（昭和十七年七月、健文社）など、その後の研究書でも『陸軍歴史』の方の史料が用いられている。

(5) 佐藤昌介『洋学史の研究』、一九八〇年、中央公論社）、一六頁。

(6) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、二七三頁の注記（8）。

(7) 『国史大辞典』（吉川弘文館）第一〇巻を参照。なお、『増補大日本地名辞書』（冨山房、一九七〇年）の第六巻に収録された項目「徳丸原（トクマルハラ）、新風土記、荒川に傍り東の方、志村の原に続けり、古は概して赤壁に属せしが、今多くの徳丸村に係るをもって徳丸原と呼ぶ。東西十三丁南北八丁余、火術を学ぶものは往々其業を此原に試む。」とある。また、『角川日本地名大辞典』（角川書店、一九七八年）には「徳丸原は赤塚六か村の入会原であったが、寛政四年以降、幕府の大筒試射の調練場となり、村民らは江戸から徳丸原までの御用人足に徴発された。」と記されている。

(8) 「徳丸原調練業書」は、『陸軍歴史』巻一（前掲『勝海舟全集』第十五巻、二三―二六頁）に収録。

(9) 「天保十二年年五月九日　武州西台徳丸之原（ママ）に於て砲術業書（実演結果報告）」は、同書、二四―二六頁に収録。

(10) 幕府鉄砲方・井上左太夫　「徳丸原火術見分の概況上申」は、同書、二六―二三〇頁に収録。

(11) 大槻如電編『新撰洋学年表』、柏林社書店、一九二七年。

(12) 同上、大槻如電編『新撰洋学年表』、一二六頁に記載。

(13) 遠藤早泉『高島秋帆』、（健文社、一九四二年）。

(14) 「天保十二年五月九日於武州徳丸原西洋砲術業書」は、同上の遠藤早泉『高島秋帆』、一五五―一五六頁に収載。

(15) 徳丸原での砲術操練における参加門人その他の「部署並に見分の

役々」という史料は、同上の遠藤早泉『高島秋帆』、一五四―一六七頁に収載。

(16) 「高島秋帆翁試砲于江府図記」は、同上の遠藤早泉『高島秋帆』、二七一―二七六頁に収載。

(17) 『天保雑記』は、史籍研究会『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第三十二巻『文政雑記・天保雑記（三）』（汲古書院、一九八三年）に全文が収録されている。

(18) 史料「天保十二年五月九日武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」は、同上の『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第三十二巻『文政雑記・天保雑記（三）』の七五―七六頁に、同じく史料「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」は、同書の八〇―八二頁に収録されている。なお、『天保雑記』に関する詳細な内容紹介が、『文政雑記・天保雑記（一）』の巻頭に南和男「解題」として収められている。

(19) 佐藤昌介『洋学史の研究』（中央公論社、一九八〇年）、二七三頁の注記（8）。

(20) 佐藤昌介『洋学史の研究』（中央公論社、一九八〇年）、三一三頁。

(21) 前掲、大槻如電編『新撰洋学年表』、一二六頁。

(22) 佐藤昌介の『洋学史研究序説』は、一九七四年に岩波書店から刊行されたが、その六年後に続編となる『洋学史の研究』（中央公論社、一九八〇年）が出版された。

(23) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、二六九―二七〇頁。

(24) 栗原隆一『幕末日本の軍制』は、新人物往来社から一九七二年に刊行。

(25) 前掲、栗原隆一『幕末日本の軍制』、二五―二七頁。なお、福地源一郎『高島秋帆』（第一編）は、博文堂から一八九八年に刊行された少年用の平易な読本。

(26) 仲田正之『韮山代官江川氏の研究』は、一九九八年に吉川弘文館から刊行。

(27) 同上、仲田正之『韮山代官江川氏の研究』、三七八―三七九頁。

(28) 佐藤昌介『洋学史研究序説』に、有馬成甫蔵「武州西台於徳丸原高島流砲術稽古業書」が使用されたとの記載は、同書、三二一頁の注記（17）。

(29) 徳弘孝蔵とその子息たちが遺した膨大な量の土佐藩「徳弘家資料」は、現在、高知市民図書館の所蔵。この資料を一〇有余年に亘って解読分析した研究成果が、拙著『幕末洋学教育史研究』（高知市民図書館より刊行、二〇〇四年三月）である。

(30) 徳弘孝蔵自筆の「絵入り書簡　徳丸ヶ原ト云処へ」という史料は、「徳弘家資料」の中の「年譜覚書等史料」（史料番号―書簡資料D〇一八）として収録されている。なお、同史料に描かれている人物については、まず藩士二人の内の一人は徳弘孝蔵その人に間違いなく、残るもう一人の「野村」と記された藩士は、孝蔵と同役の御持筒役の「野村八郎右衛門」（三人扶持切米八石、後に白札に昇格）の養子の「野村亀四郎」ではないか、また「弁当持」と添書された従者は「大利何某」という人物ではないか、との御教示を高知市在住の幕末史研究者の松田智幸氏より受けた。

(31) 前掲、佐藤昌介『洋学史の研究』、二七三頁の注記（8）。

(32) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、二六九―二七〇頁。

(33) 同上、佐藤昌介『洋学史の研究』、二六九頁。

(34) 『江戸幕府旗本人名事典』（原書房、一九八九年）第四巻、五〇二頁。同頁に掲載の「松平（大給・三河）・寄合」に関する天保十二（一八四一）年刊の『昇栄武鑑』には、「松平内匠頭乗譲　五〇〇〇石　父　信濃守　御留守役　南八丁目堀三丁目」と記載されている。

追記

本稿を纏めるに際して、史料「高島流砲術」（「山内文庫」）の写真撮影や本誌への掲載を快諾された高知県立図書館、及び関連資料の提供などで協力を頂いた高知市民図書館には、深謝の意を表したい。また、本誌の冒頭に掲載した「新法火術図　高島秋帆（舜臣）図　写本（彩色）」は、東北大学附属図書館が所蔵する「狩野文庫」に収められた非常に貴重な史料である。筆者からの本誌への掲載依頼に対して、快く御許可下された同大学附属図書館の関係各位に謹んで御礼を申しあげたい。さらにまた、平成十六年二月に出版した拙著『幕末洋学教育史研究』（高知市民図書館刊、高知県出版文化賞、並びに高知出版学術賞を受賞）以来、種々、御教示を賜ってきた、高知市在住で幕末史研究家の松田智幸氏には、今回もまた大変お世話になった。衷心より感謝申しあげたい。

ところで、筆者が信州大学に着任して五年の歳月が流れ、はやくも六回目の春を迎えた。着任以来、毎年度、筆者個人で研究室から「研究報告書」を刊行してきた。だが、それも、本誌第五号をもって一つの区切りを迎えた。平成十八年度は、信州大学が国立大学法人となって以来、初めての本格的な学内組織の改革が行われ、筆者は、これまでの少数精鋭のスタッフで構成された「高等教育システムセンター」から、全学的な組織である「全学教育機構」（学部扱いの大所帯）に所属が変更となる。

また、筆者自身の研究面においても、本誌に掲載した論文をもって、高知市民図書館や高知県立図書館が所蔵する土佐藩関係史料「徳弘家資料」その他の、幕末期の洋学史関係史料を用いた研究が一段落する。前述の拙著『幕末洋学教育史研究』は、関係各位から好評を賜り、出版後、僅か一年有余の短期間で、初版を完売することができたことは、一応、著者としての責任を全うすることが出来たものと安堵している。出来うれば、筆者の幕末洋学教育史研究の集大成として、本誌掲載の論文をも含めた増補改訂版を、近い内に刊行できればと念じている。

今後は、筆者が四十年近く前に出会った越後長岡藩を舞台とした、いわゆる「米百俵の世界」の研究に専念し、一冊の学術研究書（仮題：『「米百俵」の思想世界―日本近代化と象山門人・小林虎三郎の教育的軌跡―』）として出版したいと思っている。